安国寺遺跡出土の「井の字形組合せ木器」と木製机

下　村　　智

はじめに

大分県東国東郡国東町に所在する安国寺遺跡は，戦後間もない1950（昭和25）年５月から1952（昭和27）年11月にかけて，大分県教育委員会と九州文化総合研究所によって調査された弥生後期終末を中心とする九州の代表的な農耕集落である。３ヶ年５回にわたる発掘調査でU字形の濠に囲まれた掘立柱建物群，濠内からはこの遺跡を標式とする「安国寺式土器」をはじめ，木製農具，木製容器，建築部材など夥しい遺物群が出土し「西の登呂」として現在でも注目を集めているところである。

この調査は，当時の九州考古学の総力を結集して行われたもので，1951（昭和26）年５月に実施された第３次調査で，南濠内第１調査区の比較的浅いところからいげた形の組合せ木器が発見（註１）された。当時わが国では，奈良県の唐古遺跡（註２）や静岡県の山木遺跡・登呂遺跡（註３）などで弥生時代の農耕集落遺跡が調査されていて，多数の木製農具や容器などが出土していた。登呂遺跡や山木遺跡では枘と枘穴で組合わせる腰掛や脇息状の木器は発見されていたが，安国寺遺跡で出土したいげた形の精巧な組合せ木器は全く見つかっておらず，用途については判断が下せなかった。「その栓や楔止めの技法に一同興味を覚えたが，用途については未だ検討がつかない。」として解釈を保留し，今後の発見例に委ねられた。1978（昭和53）年，山陽新幹線車輛基地の道路付替に伴う事前調査として福岡県春日市辻田遺跡（註４）が発掘され，多種多様な木製品と共に組合せ木器の部材がまとまって発見された。その報告書には，安国寺遺跡出土の組合せ木器が参考例として掲載されているが，用途については未解決のままであった。1980年代から90年代にかけて，北部九州の各遺跡から組合せ木器の部材と考えられる木製品の発見が相次ぎ，1992年度の福岡市雀居遺跡第４次調査（註５）では，各部材がほぼ完全に組合わさったままの状態で環濠の中から出土し，その実体が明らかになった。

安国寺遺跡の組合せ木器は出土してから50年を経過するが，詳細な報告書が刊行されているので細部まで検討することが可能である。そこで，まず安国寺遺跡出土の組合せ木器を検討し，合わせて北部九州出土の組合せ木器について若干の考察を行ないたいと考えている。

Ⅰ　安国寺遺跡出土の組合せ木器

それでは，まず安国寺遺跡出土の組合せ木器からみてみよう。これは，第３次調査で南濠内第１調査区の比較的浅いところから，組合わさったままの状態で出土したものである（註６）（図１～３）。発見された部材は横板とされるもの３点，反り板とされるもの２点，ひとつはやや離れて出土したが枕木とされるもの２点，反り板に差し込まれた楔２点の合計９点である。これを図１－24にあるよう

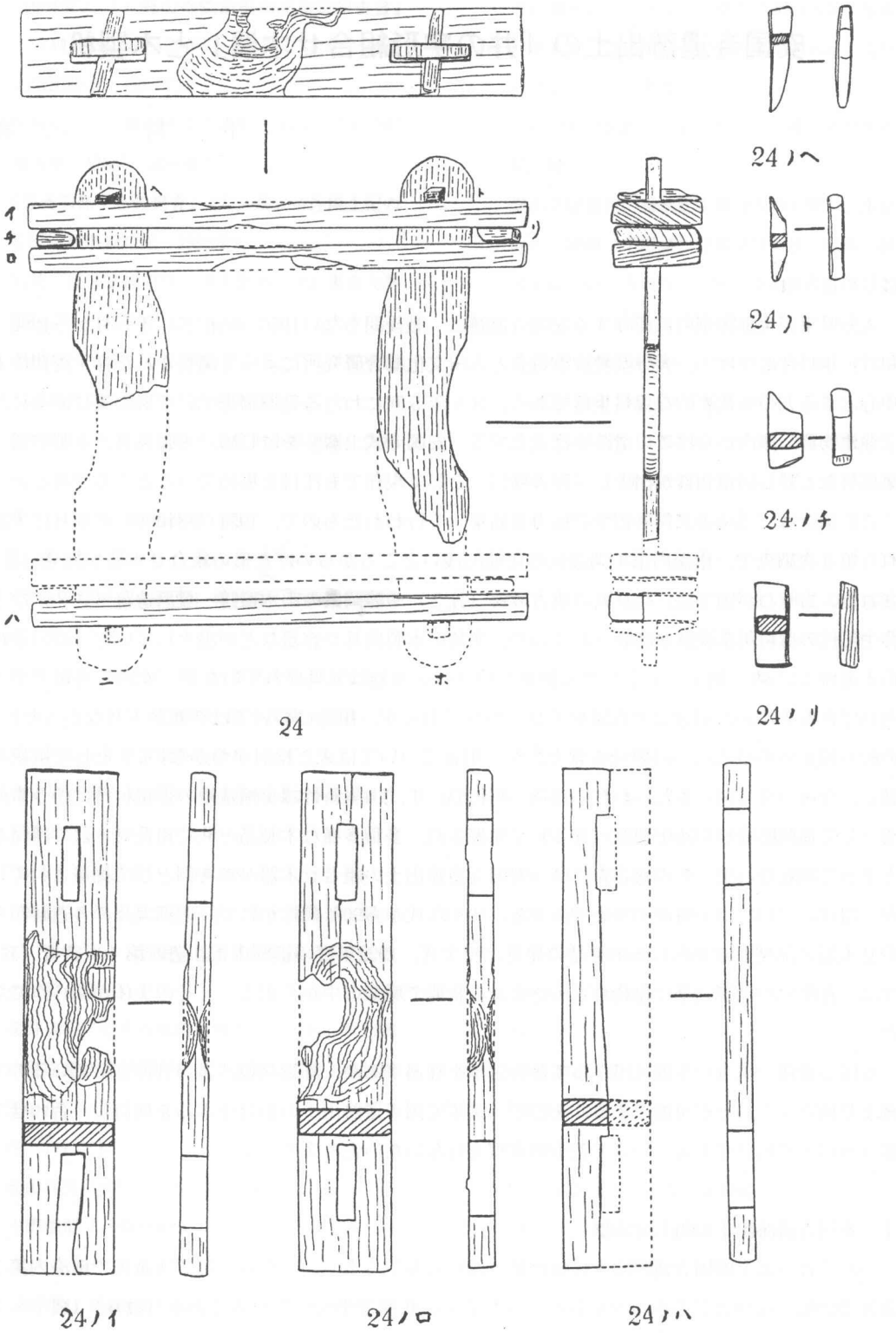


図1　安国寺遺跡出土組合せ木器部材実測図（1／4）（文献1より）

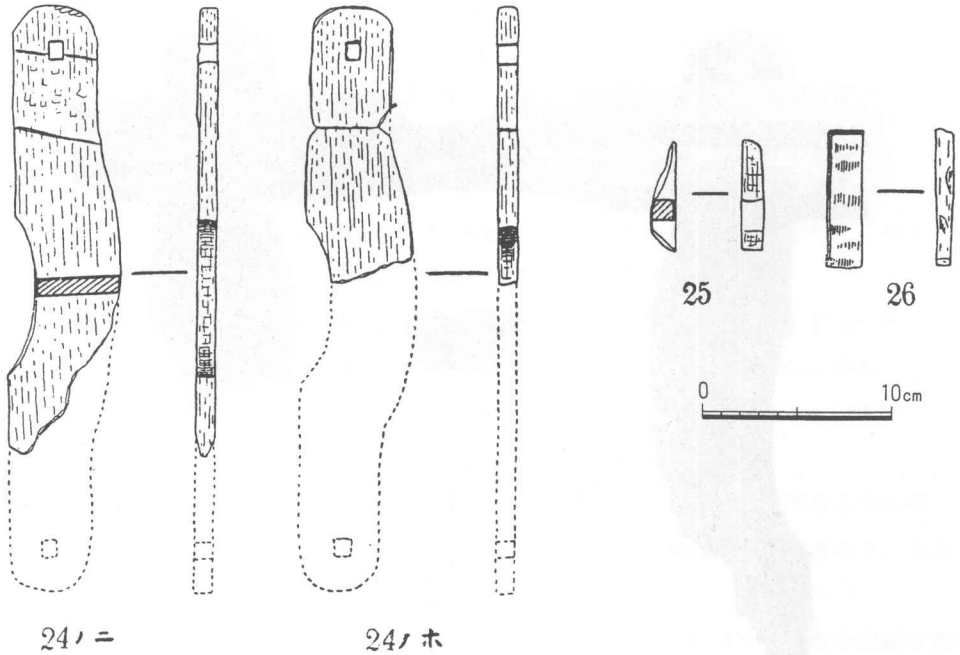
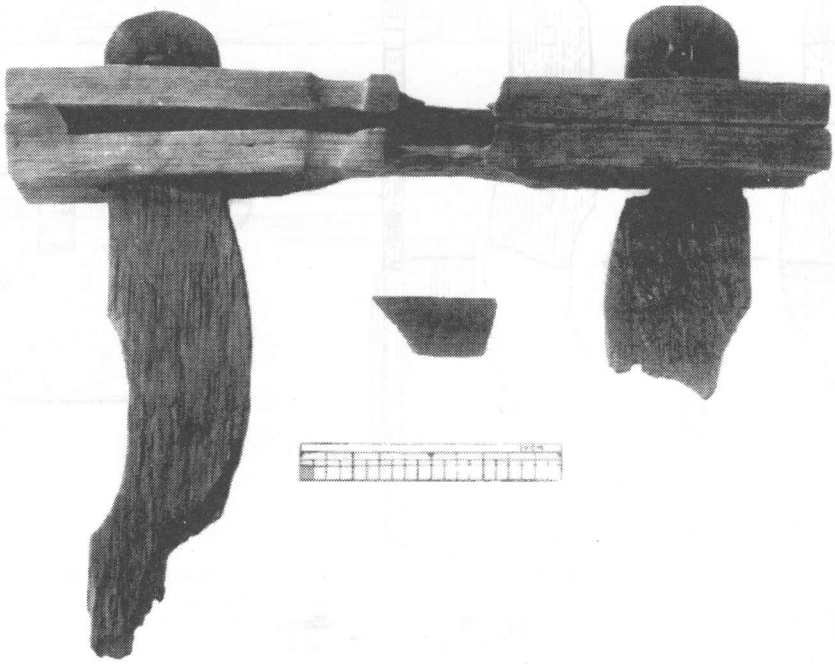
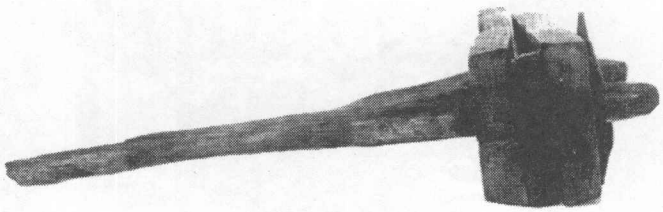


図２　安国寺遺跡出土組合せ木器部材実測図（１／４）及び部材出土状況（文献１より）





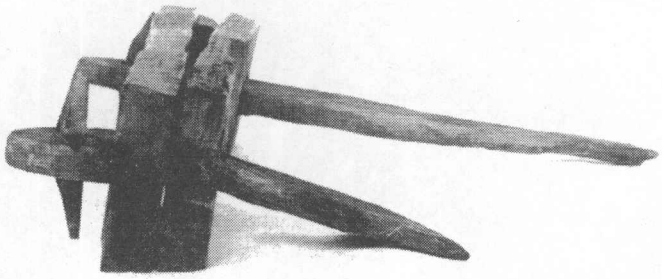


図３　安国寺遺跡出土組合せ木器（文献１より）

に14個の部材からなる「井の字」形をおもわせるような枠に復元された。

図１左上の24は，組合わさった状態の実測図に下半部を復元したものである。イからリは各部材を示している。報告書の写真と実測図とを照合した結果，この復元図の記号と個別実測図との記号がズレているのが分かったので，ここで訂正しておきたい。復元図のイは24ノロ，ロは24ノイ，ニは図２の24ノホ，ホは24ノニ，へは24ノト，トは24ノへとは異なり25の可能性がある。

横板とされるものは３点で，長さ30.7cm，幅5.4cm，厚さ1.5cmで１～２mmの誤差はあるもののほぼ同じ規格で製作されている。幅1.0～1.2cm，長さ4.5cm（註７）前後の枘穴を2個穿ち反り板を挿入している。これらは比較的厚味があり，四周には面取りを施していない。

反り板は２点あり，ともに下半部を欠損している。枘の頭部は半円形に整形し１cm前後の方形孔を開ける。体部には片方に長さ8.4cmの半円形の刳込みを入れ，片方は円弧を描く。枘部分から体部に移行するところには段を形成せず，そのままストレートに移行する。最大幅5.4cm，厚さ1.1cmを測る。チとリは枕木とされた板状の部材の破片である。

へとトは反り板の方形孔に差し込む楔である。台形状に整形し長辺が横板に接するように挿入される。24ノへは台形状を呈さず，横板の幅よりも１cm長いので，へとは異なるものであろう。写真の形状からすると25に最も近いが，断定はできない。

これらの部材はカヤ属の良材を使用し，ヤリガンナ様の刃物でたん念にけずりながら表面を調整していると報告されている。時期的には安国寺式土器の壺などと一緒に出土しているので弥生後期終末段階のものとしてよかろう。

また，図には示していないが，報告書の第102図に60として板状の部材が図示されている。板材は焼けて縦に割れた一部分である。長さ47.5cm，現存幅8.0cm，厚さ0.7cmを有し，片面の両端に幅３cm以上の焼け残りの部分が観察される。焼けていない片面はきれいに調整されている。建築材の頁に含められているが，建築用材としてはふさわしくないと述べられている。両端の焼け残りの部分には横板が挟まっていた可能性があり，これも組合せ木器の一部材ではないかと推察される。

この組合せ木器の用途は，当時，模造品を作って幾たびか実験を試みられたが，遂に結論は得られなかった。将来解明するための参考として幾つかの観察所見が箇条書で示されている。その中で事実に関する部分は，①２枚づつ両側に組合わせた横板をもつこと，②楔は固く打ちこまれ，あまり抜きさしした形跡がみられないこと，③２枚の反り板は刳込みの部分を外側にむけていること，などを挙げることができる。極めて示唆に富む研究が行なわれていた。

Ⅱ　北部九州出土の組合せ木器の諸例

1980年代から90年代にかけて北部九州地域で組合せ木器の部材と考えられる木製品の出土が相次いだ。遺漏もあると思われるが，各遺跡から出土した部材についてみていきたい。

１　福岡市雀居遺跡（註８・９）（図４～12）

福岡空港内西側の国際線整備に関わる調査で，1992年度（第４次）と1993年度（第５次）の調査で合わせて40点近い部材が出土している。その多くは大型掘立柱建物群を取り囲むSD02・SD03上層・SD002・SD221（註10）とした環濠内からの発見である。第4次調査のSD03からはほぼ完全に近い形で

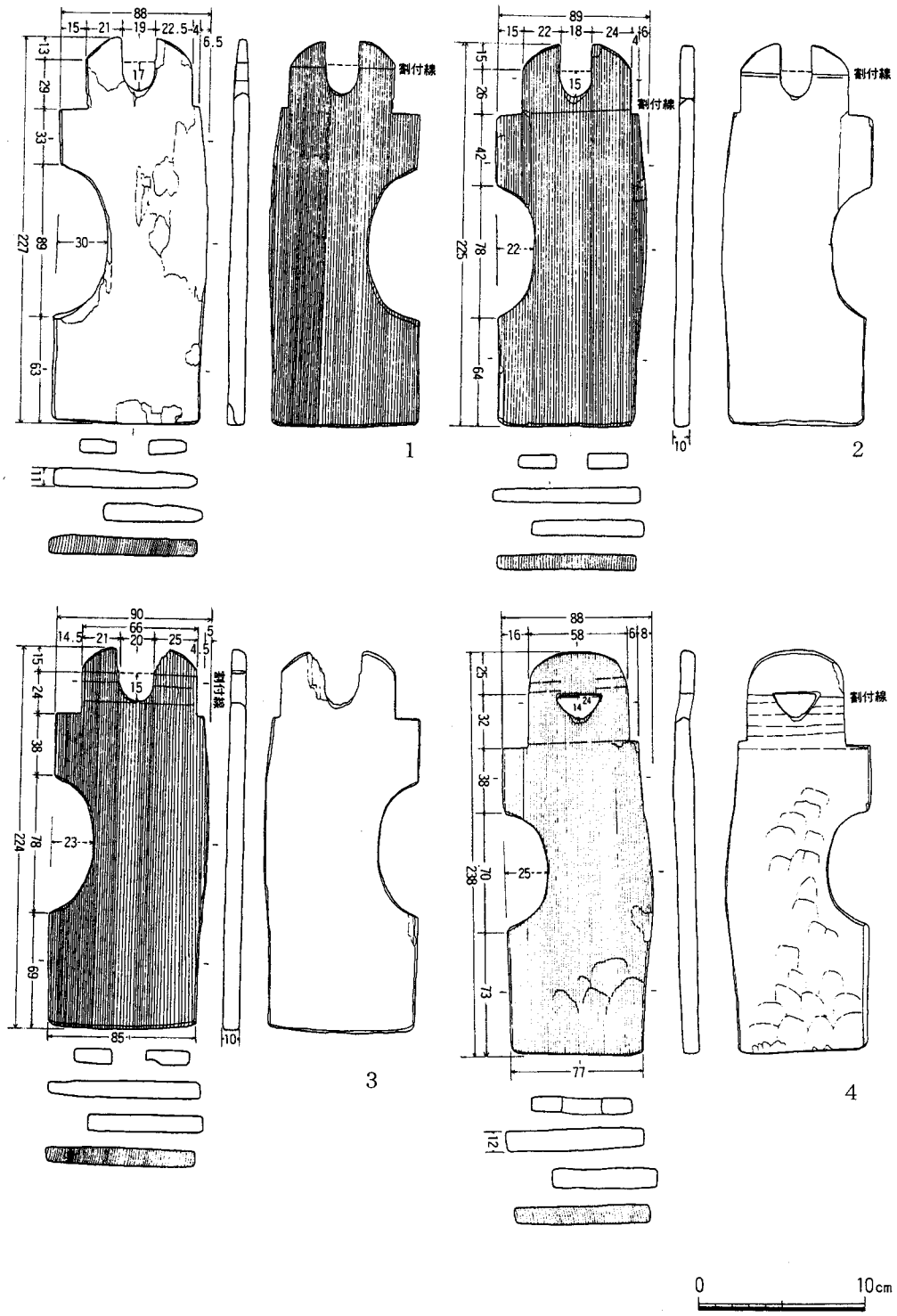


図４　雀居遺跡第４次調査出土机部材実測図（１／４）（文献５より）

全部材が出土（図８）した。

出土状態は，組合わさったまま裏返しになっており，脚を１本欠失しているのみであった。この発見によって，これまで用途不明木製品として報告されていたものの実体が明らかになったのである。構造は，１枚の薄板で作られた長方形の短辺両側に２ヶ所づつ計４個の枘穴をあけ，やはり２ヶ所づつ枘穴を開けた細板で上下から挟む。頭部に孔を穿った枘をもつ脚を，重ねた枘穴に挿入し，とび出した枘部分の孔に鼻栓を差し込み固定するものである。脚には半円状の刳込みが入れられ刳込みの方が外側を向く。極めてしっかりした作りの組合せの机（註11）（図24）になる。

図４，図５～５・６は脚で，法量は図に示している通りである。全長23.5cm前後，22.5cm前後，20cm前後のものなどがある。枘の頭部は略半円形に加工され，僅かに面取りが施される。枘の部分には半円形もしくは逆三角形の孔を穿つ。図示していないが長方形孔を持つものも存在する。枘と体部との境には両側に段を有し，体部には半円形の刳込みを入れる。半円形の刳込みは幅が大きいものと小さいものとがある。同一固体に組合わさるものはほぼ同じ大きさの刳込みとなる。脚は，刳込みを入れた方が外側を向くので前縁となり，背縁はやや外側に丸味をもって整形される。背縁は緩やかな丸味を持つものと三角形に近いものとがあり，直線的になるものも存在する。底縁はほぼ直線的に整形されている。

注目されるのは，後に述べる他の部材も同様であるが，各部位に製作前段階から割付け計画線が入れられていることである。刃物でつけられたと考えられる細い線で，枘に穿たれた孔の上位及び下位の位置，肩部の位置が示されている。これは，この組合わせ木器が「指物」を用いて製作されていることを示しているといえよう。

図５－７，図６は天板を上下から挟む挟板である。図５－７は半截しているが，長さ29.3cm，枘穴が2ヶ所開けられ長さ6.5cm前後となり，割付線によって枘穴の位置が決められている。上面には細かい刃物キズが観察される。図６－11～14は４点とも一式に組合わさる挟板である。長さ33.6～34.0cmで，幅4.7cm，厚さ0.9cmを測る。枘穴は２ヶ所開けられ，長さ６cm，幅1.0～1.2cm前後である。11と12がセットになるもので，11は天板の上側に12は下側にくる。11の天板に接する面には枘穴の割付線が見られ，反対の面（上面）には鼻栓の当り痕と刃物キズが観察される。12にも枘穴の割付線が一部にみられる。13と14もセットになるもので，13が天板の上側，14が下側に組合わさる。13は11と同じように天板に接する面には枘穴の割付線が明瞭に残り，上面には刃物キズが一部に見受けられる。14にも枘穴の割付線が一部残る。４点とも天板に接する面以外は丁寧な面取りを行なう。その他，図には示していないが，挟板の長さが24.6cmで枘穴の長さが5cmのもの，挟板の長さが43.3cmで枘穴の長さが７cmのもの，同じく挟板の長さが43.8cmで枘穴の長さが6.8～7.0cmのものなどがある。枘穴の幅はともに1.0～1.2cm前後である。少なくとも挟板の長さから判断すると３～４種類の規格があったものと考えられる。

図５－８～10は鼻栓である。８・９は一式のもので長さ４cm，幅2.5～2.6cm，厚さ0.4cmを測り，薄い台形状に整形されている。10は小型で，同様に台形状を呈する。これは別個体に組合わさるものである。鼻栓の大きさは組合わさる脚によって異なるものであろう。

図7－15は天板である。長さ60.3cm，幅は片方が34.3cm，もう一方が33.7cm，厚さは1.2cmを測る。短

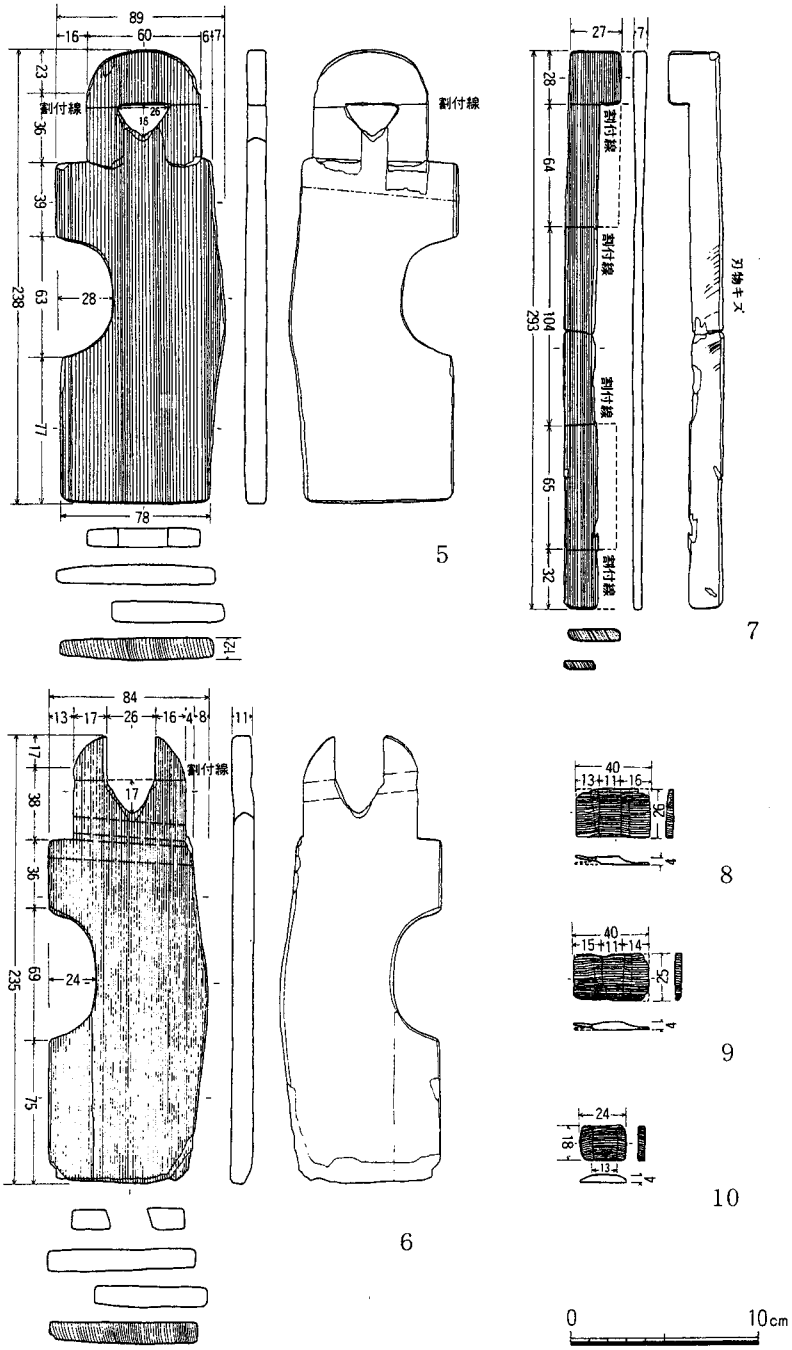


図５　雀居遺跡第４次調査出土机部材実測図（１／４）（文献５より）

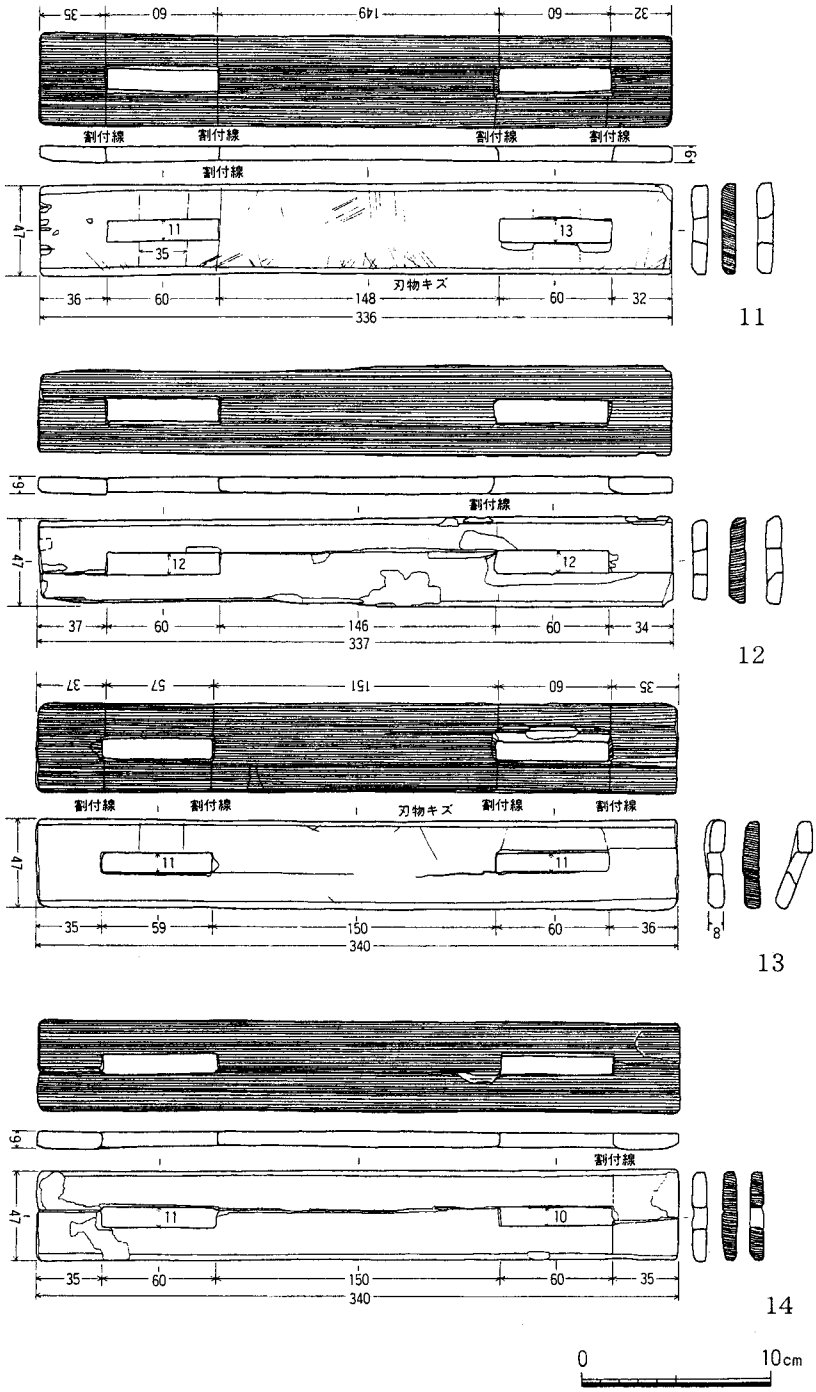


図６　雀居遺跡第４次調査出土机部材実測図（１／４）（文献５より）

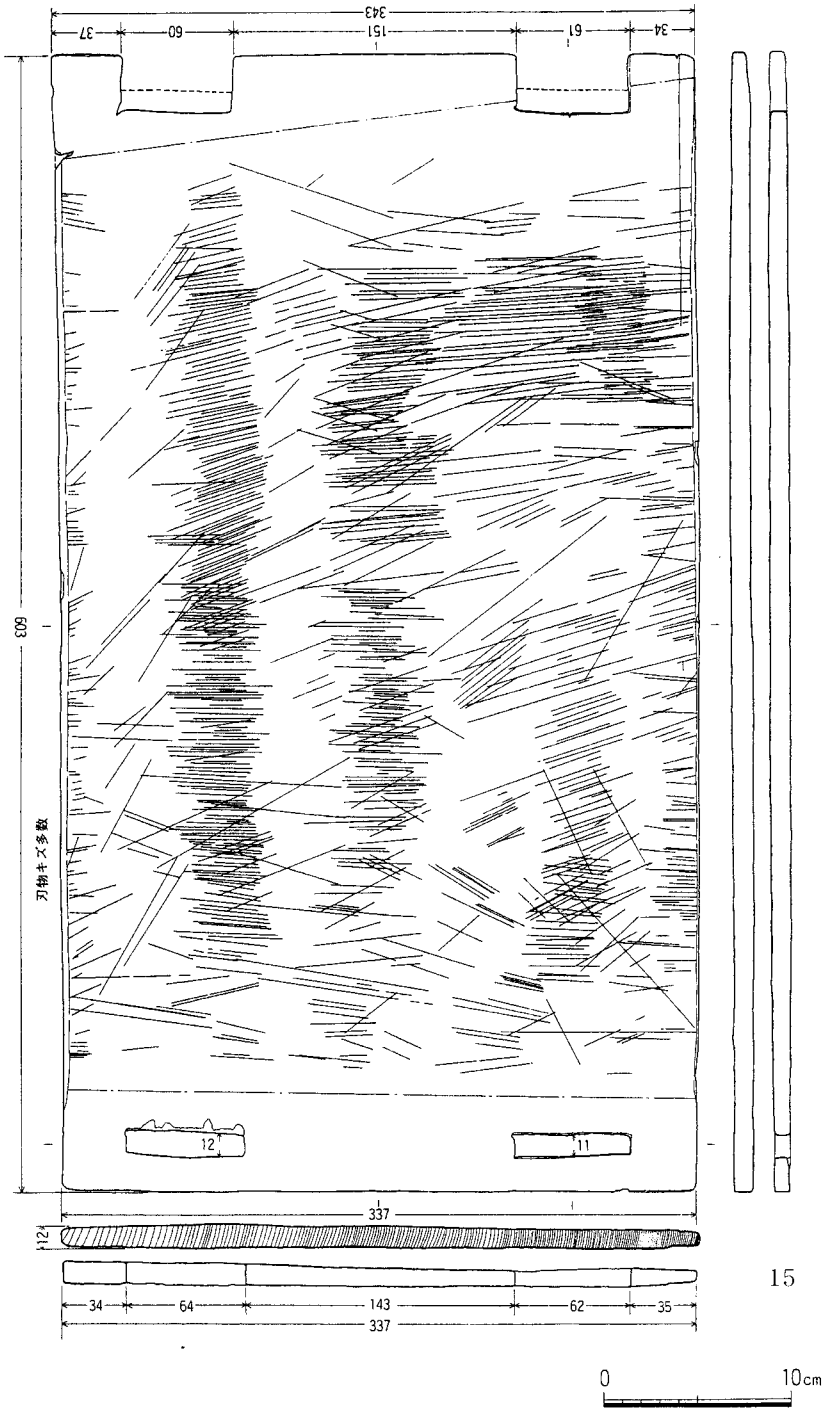


図７　雀居遺跡第４次調査出土机部材実測図（１／４）（文献５より）

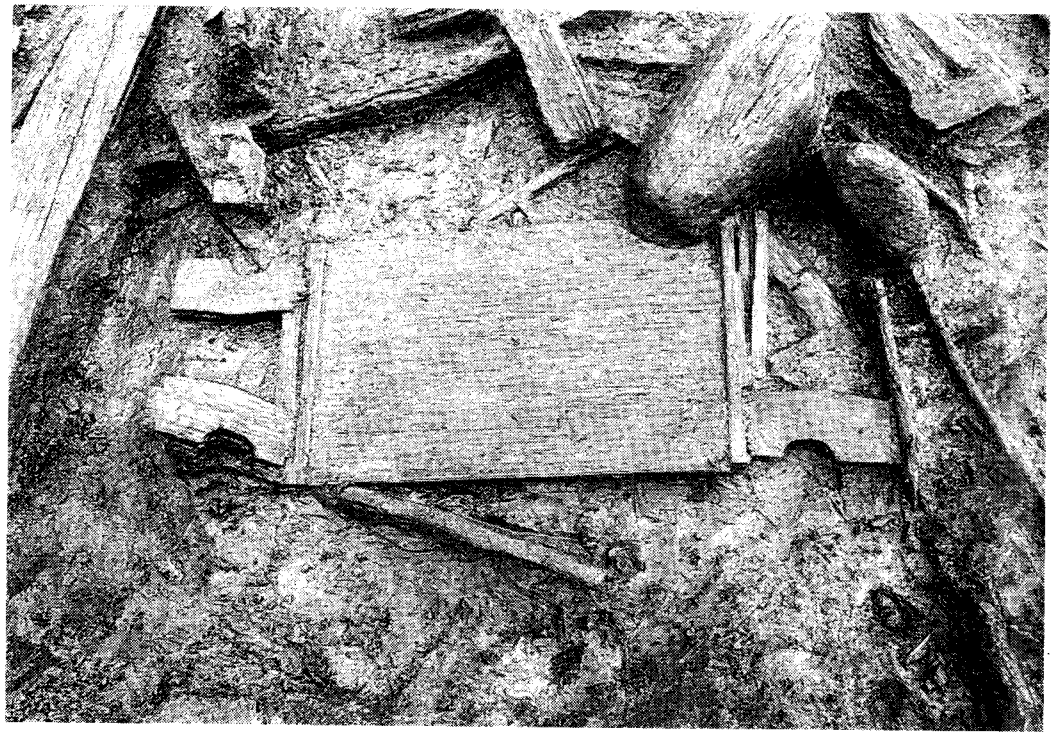
辺両端に２ヶ所づつの枘穴を開けるが，片方の部分は破損している。枘穴は挟板とほぼ同じ大きさである。枘穴のある両端には挟板の当り痕が残り，他の部分には多数の細かい刃物キズが観察され用途を暗示している。図４－４，図５－５・６・８・９，図６－11～14，図７－15が一式に組合わさる机の部材で，全てスギの柾目材が使用されている。

図９～12は第5次調査で出土した部材である。図９－１はSD221から出土した天板の一部ではないかとみられるものである。片面が薄くなっており，縦に割れたのち腐食が進んだものであろうか。報告には他の部材との組合せで使用するもので，両端には「コ」の字状の欠き込みがあるとされている。この欠き込みは枘穴の破損したものではないかと考えられる。スケールで測ると，長さ70.5cm，厚さ0.9cm，欠き込みとされる幅は5.5～5.6cmである。２と３もSD221から出土した脚部である。共に枘の部分に半円形の孔を穿つ。肩部には段を有し，背縁は直線的に復元されている。前縁には幅の広い半円状の刳込みが入れられている。２は推定全長22.5cm，３は全長19.8cm，幅6.2cmで，厚さはともに１cm前後である。

第５次調査で注目されるものはSD002から発見された大型の机の部材である。これは四周を桟木で架構し，刳込みを入れた柱状の脚を有するものである。天板は桟木に彫り込まれた溝に嵌め込むタイプである。

図10・11は机の四周を囲む桟木である。これらは溝（SD002）の土留めの杭として転用されていたもので大部分は腐朽し全長を知り得ない。４は幅9.4cm，厚さ3.2～3.4cm，残存長64.9cmを測る。残存する端部は長さ10.5cmの部分が欠き込まれ，その部分に長さ7.3cm，幅3.1cmの縦方向の枘穴を開ける。欠き込みのない平面には鼻栓と考えられる当り痕が残る。一方の側縁には欠き込み部分を除いて幅１cm，奥行2.6cm前後の溝を彫り込み，天板を差し込んだものと考えられる。５は幅10.6cm，厚さ3.6cm，残存長62.9cmを測り，端部の10.2cmを欠き込む。この部分には幅3.4cm，長さ７cmの横長の枘穴を開ける。４の欠き込み部分の厚さと５の欠き込み部分を直角に重ね合わせた合計の厚さは3.2cmとなり，４の体部の厚さとほぼ等しくなる。これらの桟は直角に組合わされ，脚の枘差しが板材で作った机と同じ構造をとると仮定すれば溝を彫り込んだ桟が短辺にくる（註12）。５の桟には，溝が彫り込まれていないが，これが長辺にくるものとみられる。図11－６は残存長43.8cmを測り，端部の欠き込み部分の一部を残しほとんど欠失している。幅9.4cm，厚さ3.2cmを測り，４と同じである。一側辺に溝の彫り込みがあり天板を差し込んだものであろう。４と同様短辺に使用された部材であると考えられる。

図12－７・８は脚部である。７は枘部分と肩部の一部を破損しているが，残存長29.8cm，肩部までの高さ25.2cm，底径10.6cmを測る。中央部にはやや長めに略半円状の刳込みが入れられる。刳込みの中央部の径は6.5cmであり，底面は直線的である。８は７とほぼ同じ形態で，全長33cm，上部には枘を作り出す。高さ7.6cm，幅6.9cmで，厚さ2.9～3.5cmを測る。上端部は面取りを行なう。枘のやや上部に2.3cmの方形孔を開ける。肩部までの高さは25.5cm，底径10.8cmで底面中央部がやや窪む。脚中央部は幅15.7cmにわたって略半円状に刳込まれ，中央部の径は6.3cmである。枘と枘穴との関係は４と７および５と８がそれぞれ対応するが，これらは共に同一個体の部材である可能性がある。これらの部材の各面は丁寧な加工が施され平滑に仕上げられている。材質は全てスギ材で木目を活かした格調



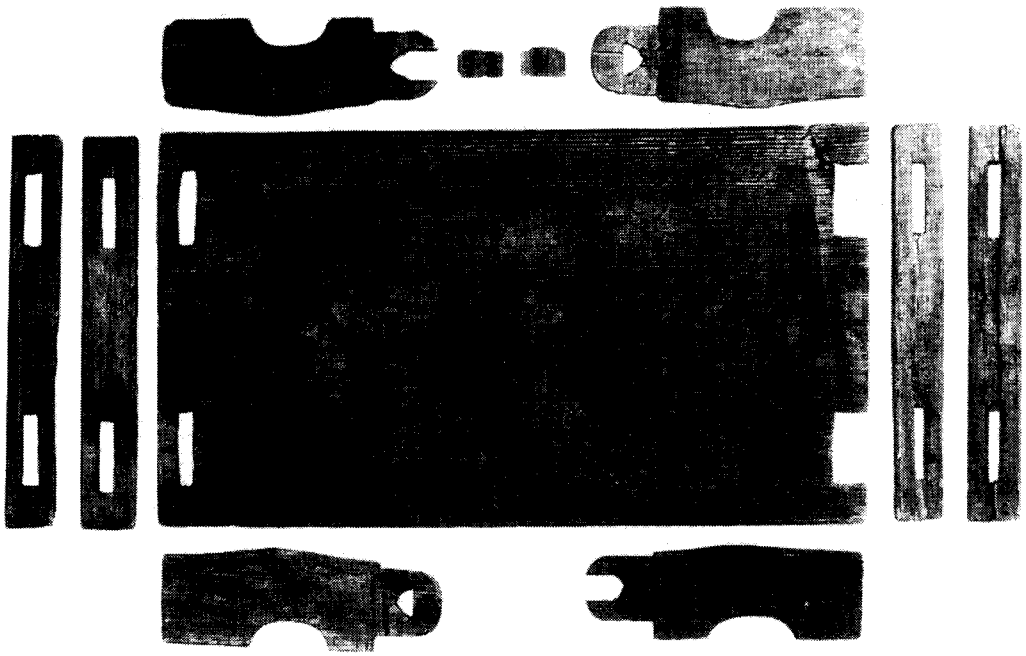


図８　雀居遺跡第４次調査机出土状況及び全部材（文献５より）

高い製品となっている（図24）。

雀居遺跡ではわが国で最も多くの机の部材が出土しており，板を組合わせた机が３～４タイプ，円柱状の脚を持ち四周に桟をめぐらす大型タイプのものがひとつあり，種類が豊富である。時期は弥生後期後半を中心に終末までの幅を考えておきたい。

2　福岡市那珂久平遺跡（註13）（図13－１）

板付遺跡の北西に位置する那珂久平遺跡から挟板が１点出土している。1983年から84年の調査で大型の井堰を伴う自然流路から出土したものである。１は半分に割れており，一端が少し欠けている。残存長29.4cmで，長さ6.3cmの枘穴を２孔穿つ。針葉樹の柾目材を使用し，面取り加工はないが作りは極めて丁寧であると報告されている。時期については自然流路のため特定できないが，中期後半から後期という時期幅で考えられている。新しく見積もっても弥生後期に収まるものであろう。

3　福岡市拾六町ツイジ遺跡（註14）（図13－２・３）

調査区の自然流路から２点の脚部が出土している。報告によれば，２は全長23.1cm，幅6.8～8.4cm，厚さ1.4cmを測り，スギのナナメ材を使用したものである。枘部分には縦1.5cm，幅2.6cmの半円形の孔を設ける。肩部は前縁のみに見られ，体部には長さ5.5cm，深さ２cmの半円形状の抉りを持つ。背縁は直線的に整形され段を持たない。全体的に厚ぼったい作りで，春日市辻田遺跡出土の組合せ部材との類似が指摘されている。３も同様の部材で，スギの柾目に近いナナメ材を使用し，枘部分を欠失する。残存長17.5cm，幅4.5～6.6cm，厚さ0.4～0.9cmである。体部にはやや粗雑ではあるが長さ6.8cm，深さ2.2cmの半円形の抉りを入れる。時期的には弥生後期に属するものであろうか。

4　春日市辻田遺跡（註４）（図14・15）

1977～78年の調査で自然流路から多数の木製品とともに組合せ木器の部材が数多く発見された。遺物は溝の西側の肩部に集中しており，西側の集落から流れ込んだものとみられている。

図14は出土した部材の一部である。代表的な例を実測図で示されている。２孔の枘穴を穿った部材（「Ａ類」）は全部で７点出土し，また，体部に半円形の刳込みを入れた部材（「B類」）は全部で11点出土している。

「Ａ類」のうち図14－１は，長さ23.5cm，幅4.6cm，厚さ0.9cmで，約8cmの距離をおいて長さ4.8cmと５cmの枘穴を開ける。雀居遺跡出土の最も小型のものと類似する。図15－７～10も同様の部材で大きさの異なるものがあり，数タイプ存在するようである。材質は９が樹種同定されていてスギ材と報告されている。

図14－２～４，図15－11～14は「B類」とされたものである。上部には枘を作り，その部分に半円形もしくは略三角形の孔を穿つ。肩部を形成する段の作りや背縁の作りにはバリエーションがある。２は，全長22.8cmで，体部に7.6cm前後の半円形の刳込みを入れる。背縁は直線的に整形されている。３は枘部分が背縁側に寄り，肩部の段が小さくなっているものである。全長23.6cm前後で，幅7.6cm前後の刳込みを入れる。４は背縁が円弧を描くタイプで，全長23.6cm，前縁の刳込みはやや幅が広く

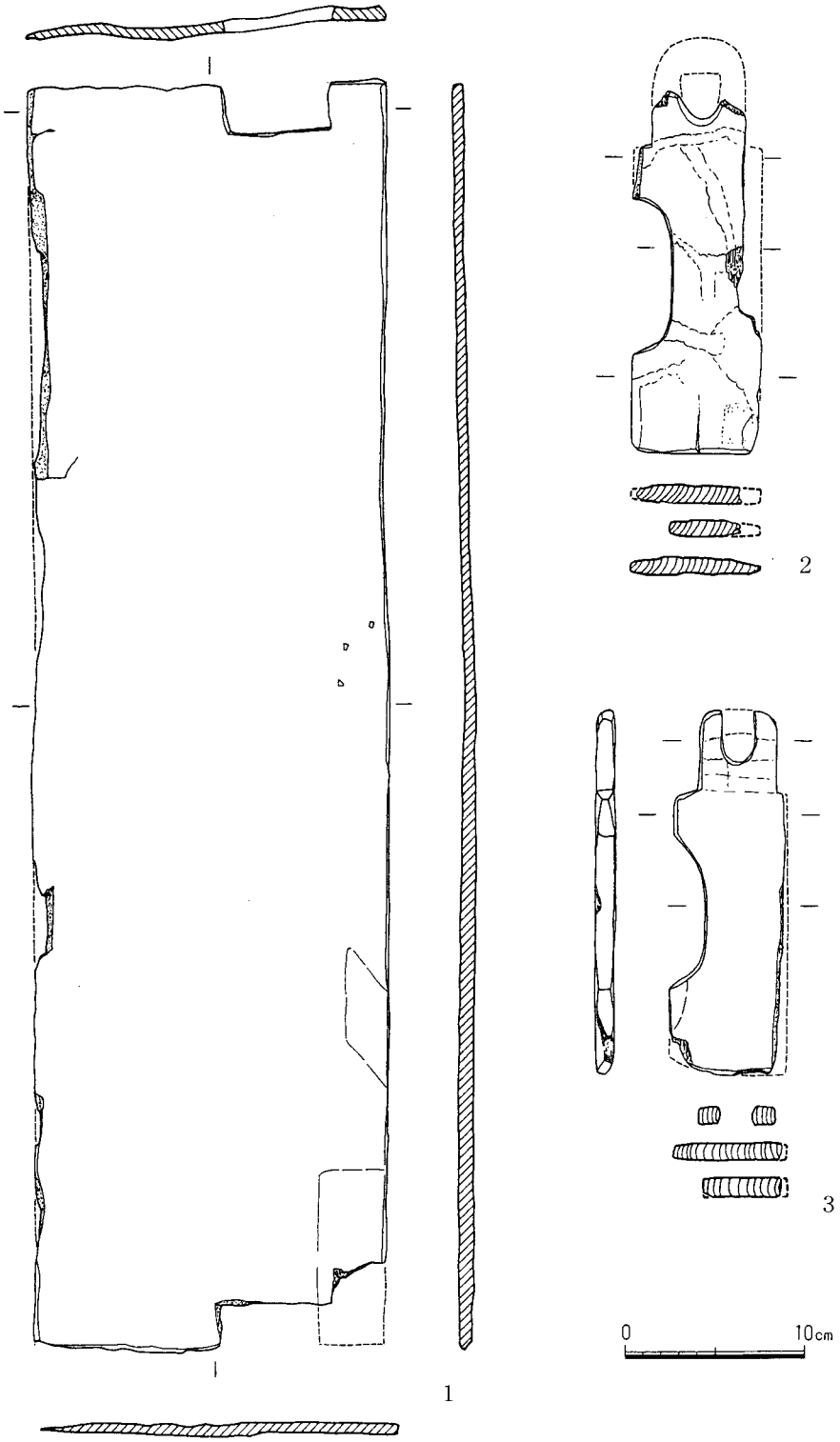


図９　雀居遺跡第５次調査出土机部材実測図（１／４）（文献９より）

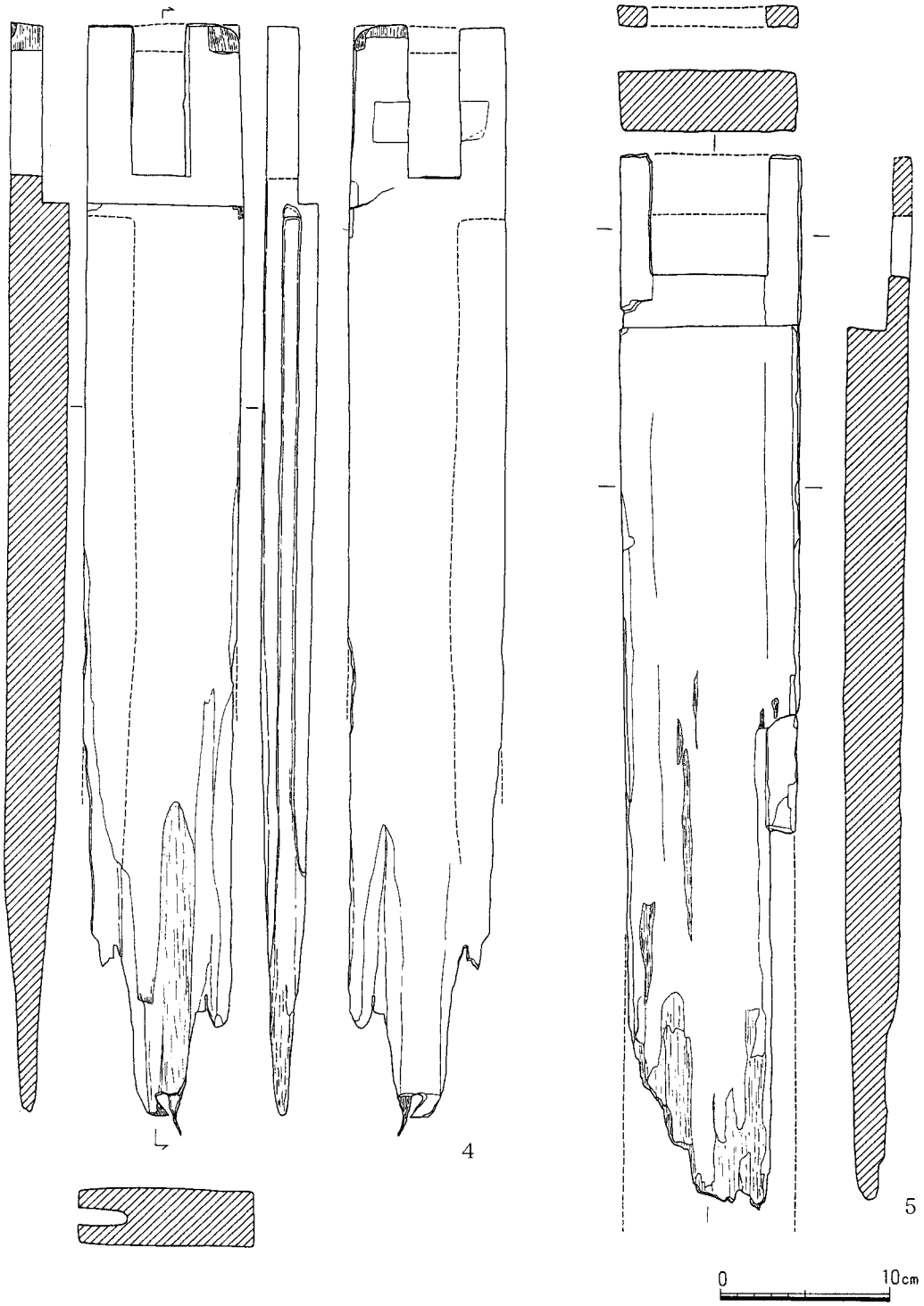


図10　雀居遺跡第５次調査出土大型机部材実測図（１／４）（文献９より）

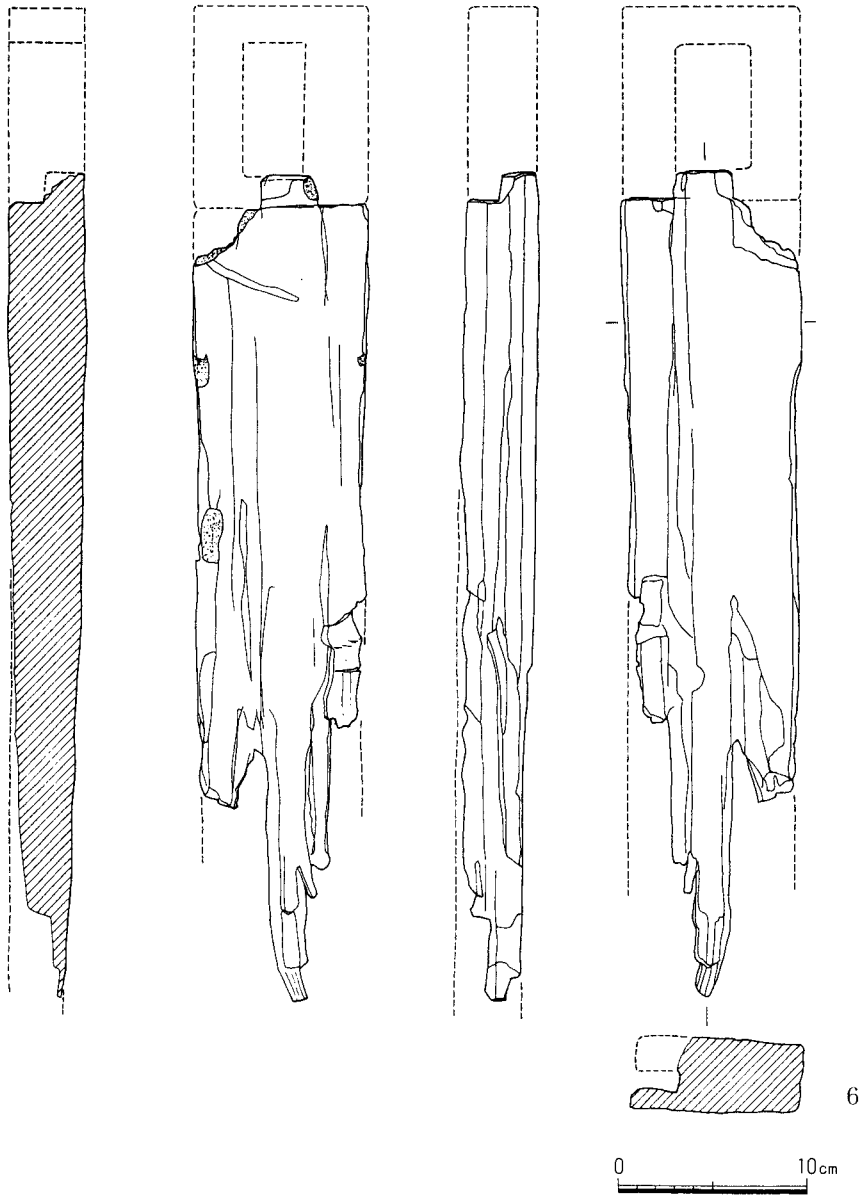


図11　雀居遺跡第５次調査出土大型机部材実測図（１／４）（文献９より）

８cm前後になる。この４には枘部分の孔に別の部材が挿入された状態で発見されたが，本来の組合せではなかろう。図15－11は４とよく類似したものである。12は背縁が直線的になるタイプで，13・14は破損していて全体の様子が分らない。14は樹種同定がなされていて，アスナロと報告されている。図14－５は挟板の一部ではないかと考えられる。長さ31.8cm前後，厚さ１cmで，半截しているが枘穴の痕跡が残る。６は天板で，破片となっており幅及び長さについては分らない。端部には幅1cm前後の枘穴を開ける。

これらの部材はスギかそれに近い針葉樹の柾目材が使用されている。枘穴を２孔穿つ細板材は机

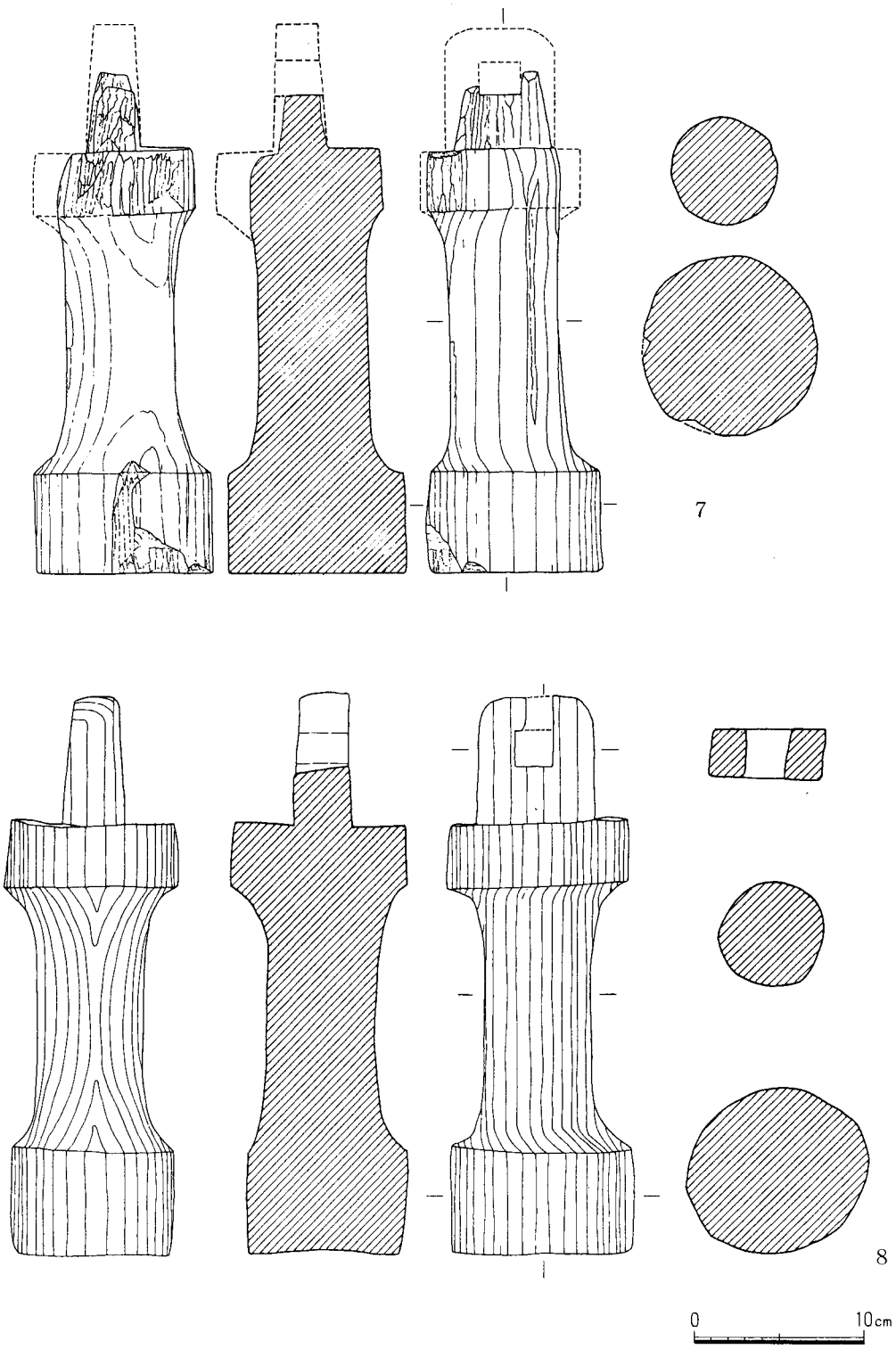


図12　雀居遺跡第５次調査出土大型机部材実測図（１／４）（文献９より）

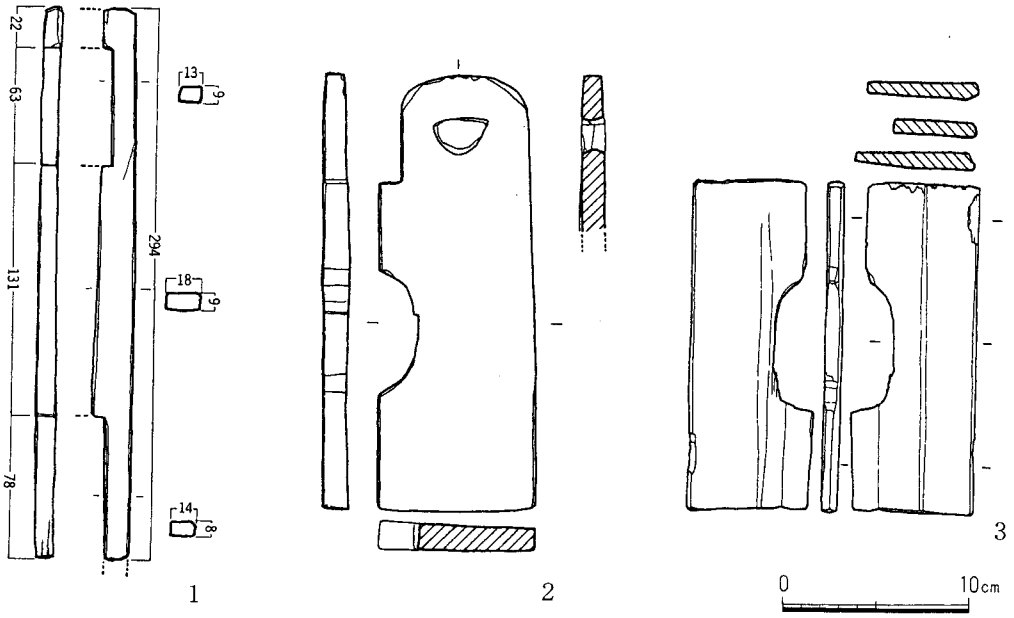


図13　那珂久平遺跡（1）及び拾六町ツイジ遺跡（2・3）出土机部材実測図（1／4）（文献13・14より）

の両端を挟む挟板，体部に半円形の刳込みを入れる部材は脚とみられる。枘穴をもつ板材は天板であろう。他にも類似した板材が報告されている。当初から「A類」の枘穴と「B類」の枘の規模はよく類似していて一体のものと考えられていた。安国寺遺跡出土例と組合わせが酷似し，類例として取りあげられているが，組合わせの想定は異なる見解を示されている。時期は弥生後期中葉から後半を中心に終末までの幅が考えられている。

また，図示していないが雀居遺跡出土の大型机の部材によく類似したものが，建築部材の頁で報告されている。報告書第93図786で，全長103cm，両端を約14cm，厚さ3cmに欠き込み，そのほぼ中央部に長さ4cm，幅3.5cmの方形孔を穿つ。最大幅12.3cm，厚さ5.3～5.6cmで，欠き込みを除いた部分の長さは75cmである。一方の側縁には幅0.6～1cm，奥行き2cm，長さ72.5cmの溝が彫り込まれ，手の込んだ作りになっている。雀居遺跡出土例に比べると，やや厚味があり，両端の孔が方形に近い形になっているところが異なっている。断定はできないが，大型机の部材の一部かも知れない。

5　甘木市平塚川添遺跡（註15）

大規模な多重環濠集落の環濠部から，木製農工具，漁具，建築部材と共に組合せ木器の部材が出土している。刳込みを入れた脚が5～6点，挟板は2組半で5～6点，それに鼻栓も出土している。雀居遺跡出土例とよく類似しているとされる。環濠の時期は弥生後期中頃から後期後半～終末の幅が考えられている。

6　福岡県北野町良積遺跡（註16）

筑後川北岸の大集落で，弥生後期終末の井戸から，体部に刳込みを入れた脚部が1点出土している。

7　佐賀市千住遺跡（註17）（図16－１）

佐賀平野の臨海低地に立地する大規模な集落遺跡で，１点の部材が出土している。１は３区ＳＫ3105から出土したもので，一部が焦げている。上部を欠失するが，体部に幅８cm前後の半円形の刳込みが入れられ，規模や形状から机の脚部と考えて差しつかえあるまい。時期は出土土器から弥生後期終末のものであろう。

8　佐賀市牟田寄遺跡（註18）（図16－２・３）

千住遺跡南側隣接地の臨海低地に立地する，掘立柱建物群で構成された大規模な集落遺跡である。図16－２は15区ＳＥ15039井戸から出土した脚部である。板目材を使用し，最大長22.9cm，最大幅7.8cm，厚さ1.1cmを測る。上部の枘部分には半円形の孔を開けるが上端部が破損している。肩部には段を有し，体部には幅7cm前後の半円形状の刳込みを入れる。背縁側は肩部の段が不明瞭になり，体部背縁はやや円弧を描く。弥生後期後半の新しい段階のものであろうか。３は小型品でＳＸ15005の貝層から出土したものである。全長12.4cm，最大幅3.4cm，厚さ0.6cmを測る。最も多く見られる脚部の約半分の大きさである。枘部分は方形に整形し，図にはその部分に孔があるような表現がなされている。肩部は前縁側のみ明瞭で，体部には幅3.5cm前後のコの字状に近い刳込みを入れる。背縁は直線的に仕上げている。この脚は極めて小型であり，ミニチュアであろう。貝層からは小型の木製品や幾何学的な文様を両面に線刻した異形木製品などが発見されていて興味深い。時期は弥生後期終末までには収まるものであろう。

9　北九州市金山遺跡（註19・20）（図17・18，図20－１）

Ｖ区の流路から450点にのぼる多量の木製品が出土した。その中で，机の部材とされる数点の組合せ木器が発見されている。図17－１・２，図18－３は脚部である。１・２はよく類似した形態を有する。枘部分に方形孔を持ち，肩部の段は前縁側に付き，背縁側は明瞭でない。体部前縁には幅の広い半円形の刳込みを入れ，背縁は外弯状に円弧を描く。１は現存長24.2cm，現存幅7.7cm，厚さ1.3cmを測り，方形孔は縦１cm，横1.2cmを測る。体部の刳込みの幅は11cm前後で，全体的に細身である。２は現存長23.8cm，現存幅7.9cm，厚さ1.2cmで，体部に11cm前後の刳込みを入れる。枘部分の方形孔は縦1.1cm，横1.2cmを測る。3は現存長21.9cm，現存幅6.2cm，厚さ1.1cmを測る。枘の一部を欠損するので孔の形状は分らない。肩部の段は前縁部のみに僅かにあり，長さ7.5cm前後の刳込みを入れる。背縁は緩やかな円弧を描く。これも２と同様細身である。

４～６は挟板と考えられる部材である。４は残存長25cm，現存幅3.5cm，厚さ1.2cmを測り，枘穴は幅1.3cm，長さ5.7cmである。復元すれば全長34.4cm前後になろう。挟板としては細身である。５は一部しか残存していない。残存長25.8cm，厚さ1.2cmで枘穴の長さは6.4cmである。６は挟板の一部分である。幅3.4cm，厚さ1.2cmで細身である。７は鼻栓で，現存長2.1cm，幅１cm，厚さ0.5cmを測り台形状

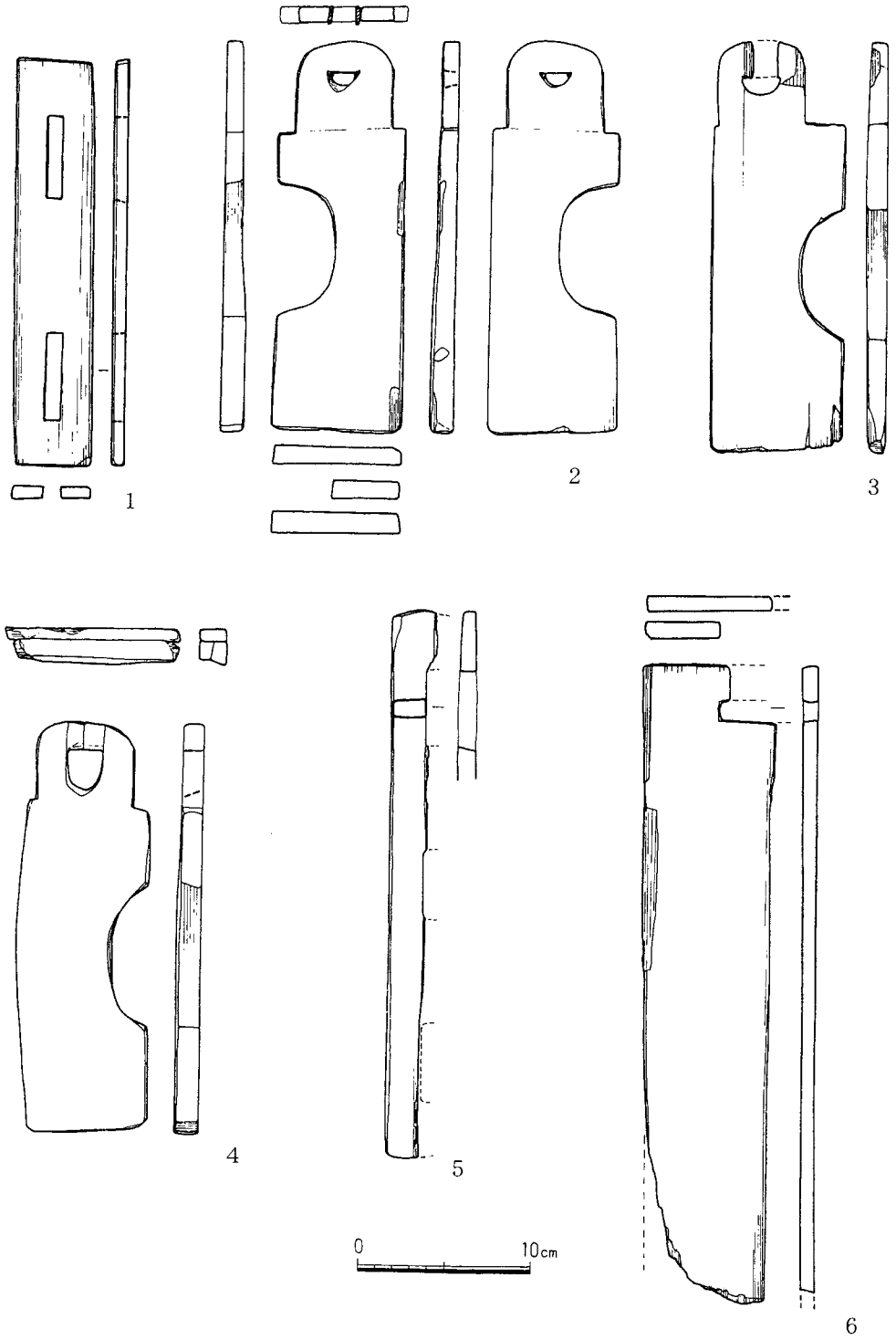


図14　辻田遺跡出土机部材実測図（1／4）（文献4より）

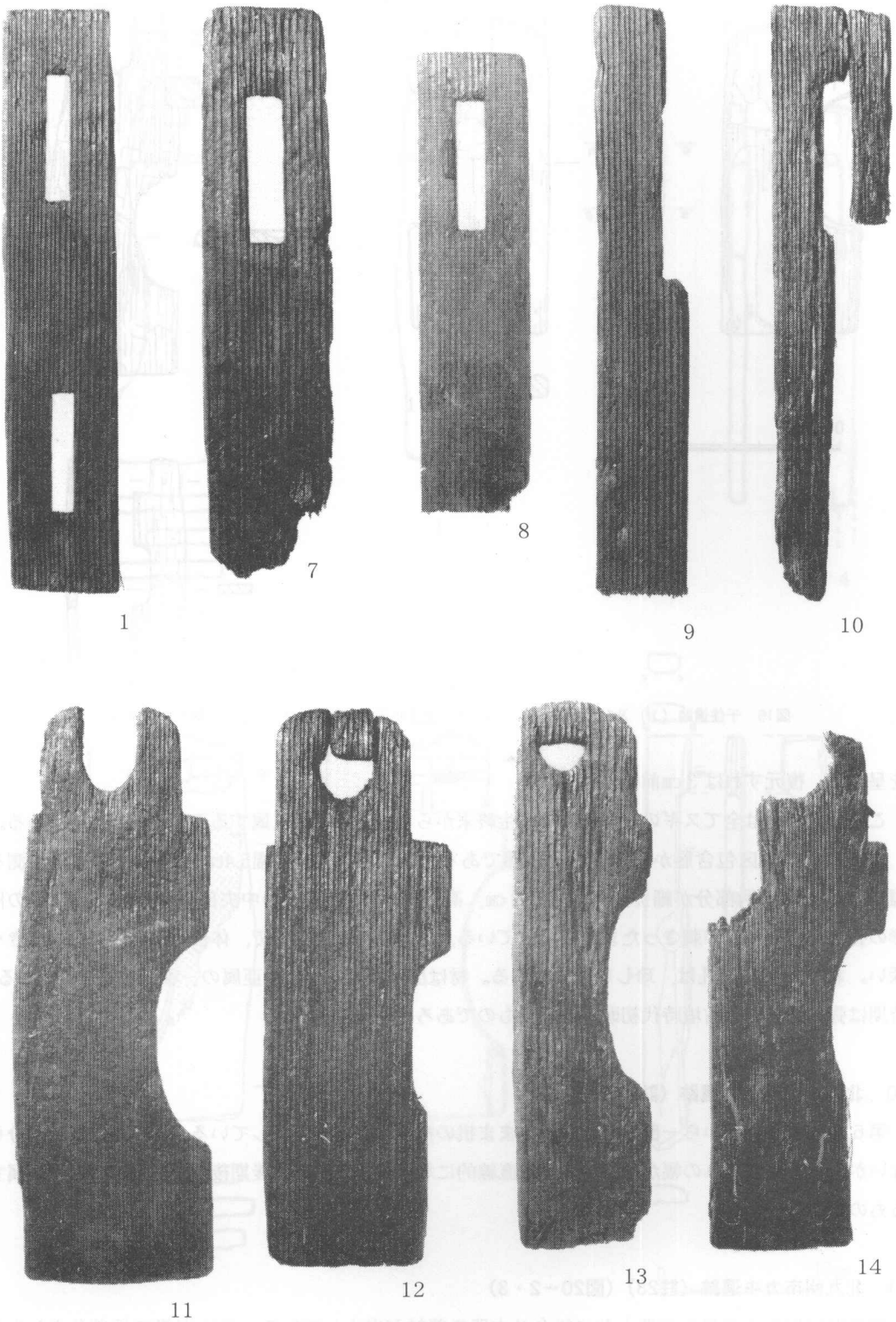


図15　辻田遺跡出土机部材（文献４より）

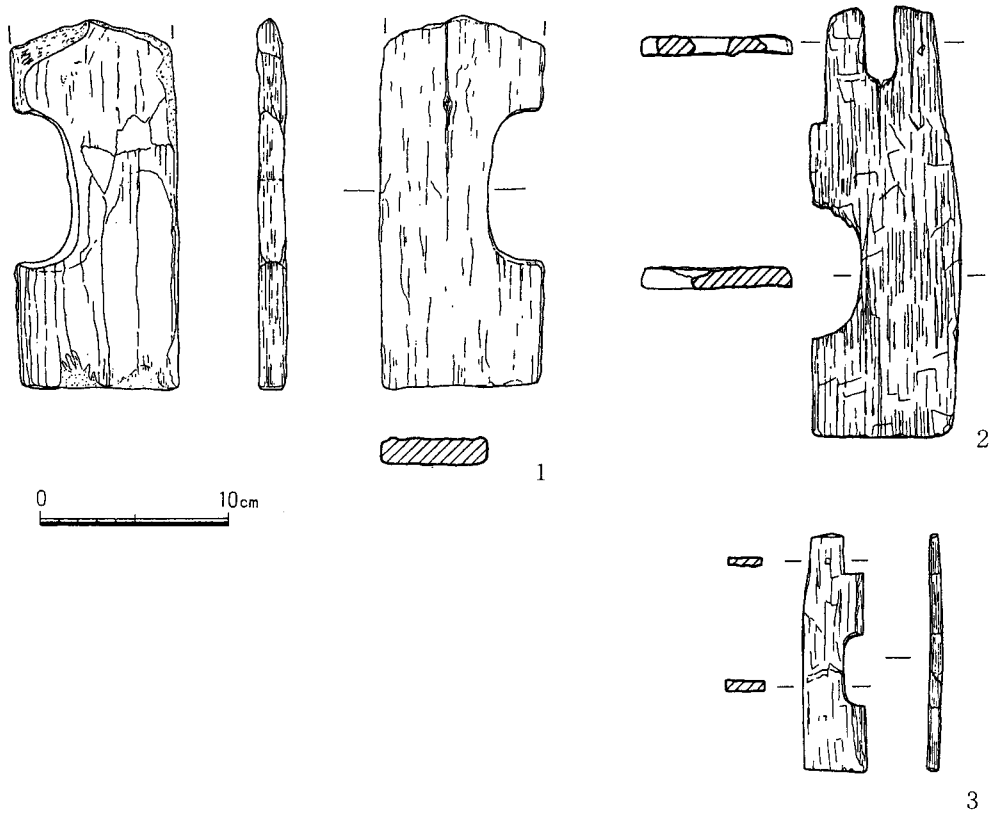


図16　千住遺跡（1）及び牟田寄遺跡（2・3）出土机部材実測図（1／4）（文献17・18より）

を呈する。復元すれば3cm前後になろう。

これらの部材は全てスギの柾目材で，弥生終末から古墳時代初頭に属するものと報告されている。

図20－1はVI区包含層から出土した脚部である。残存長15.8cm，幅5.4cm，厚さ0.6cm前後を測る（註21）。上部の枘部分が細く作られ，幅3cm，高さ7cmである。枘の中央部やや上位に径0.5cmの円形の孔を穿ち，鼻栓が刺さったままになっている。背縁はほぼ直線的で，体部の刳込みも幅が大きく深い。枘部分の円形孔は，珍しい類例である。材は広葉樹でアカガシ亜属の一種と報告されている。時期は弥生終末から古墳時代初頭に属するものであろうか。

10　北九州市下徳力遺跡（註22）（図19）

第6地点B区谷部から一部組合わさったまま机の挟板と脚部が出土している。具体的な様子は分らないが，脚部は刳込みの幅が広く，背縁は直線的になっている。弥生後期後半から終末の時期に属するものであろう。

11　北九州市カキ遺跡（註23）（図20－2・3）

溝や旧河川から多量の木器と共に組合せ木器の部材が出土している。2は脚部で枘部分を欠失している。残存長18.2cm，残存部の最大幅6.8cm，厚さ0.9cmを測る。体部の刳込みは幅が広く背縁は円

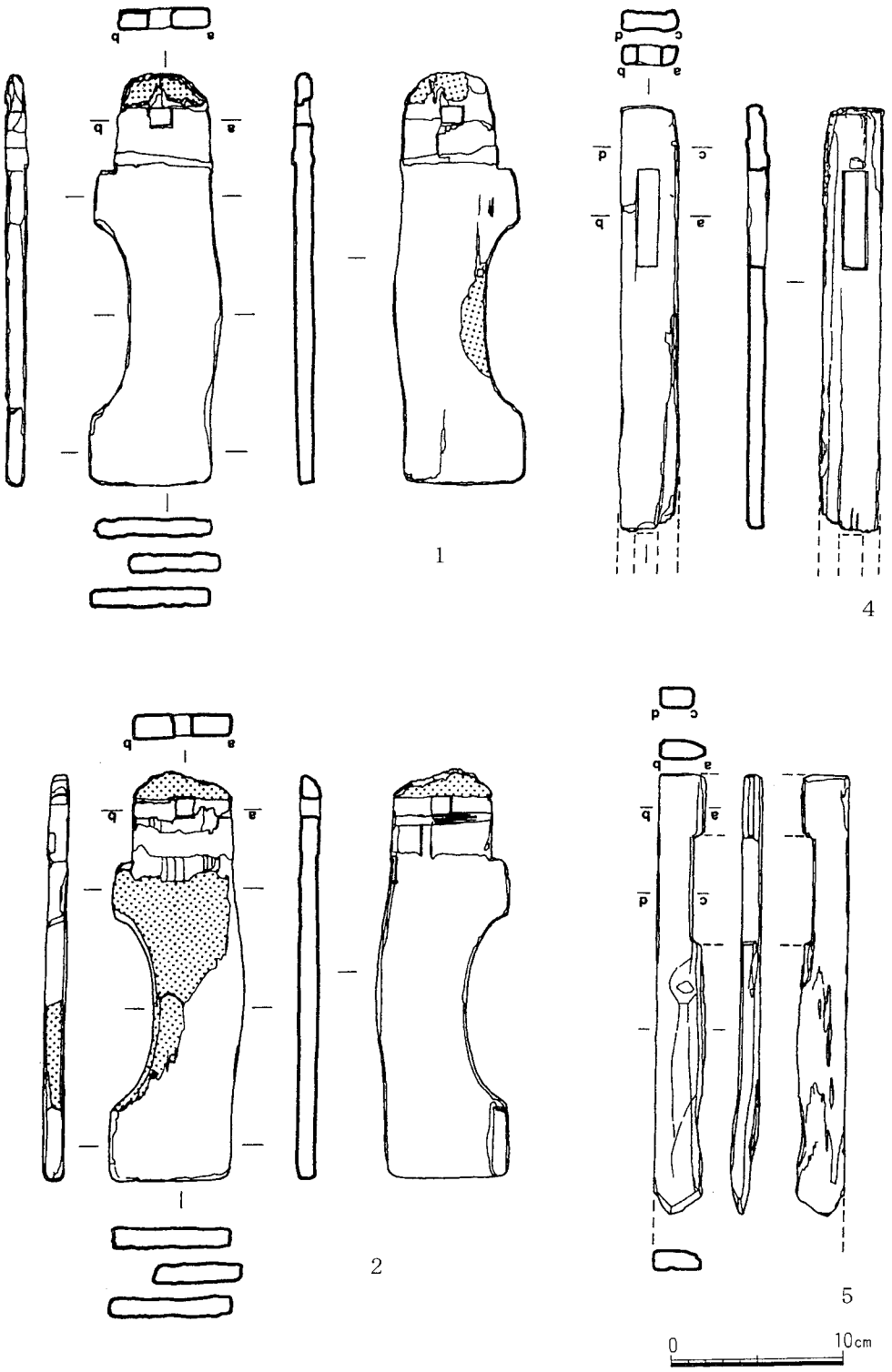


図17　金山遺跡Ⅰ・Ⅴ区出土机部材実測図（1／4）（文献19より）

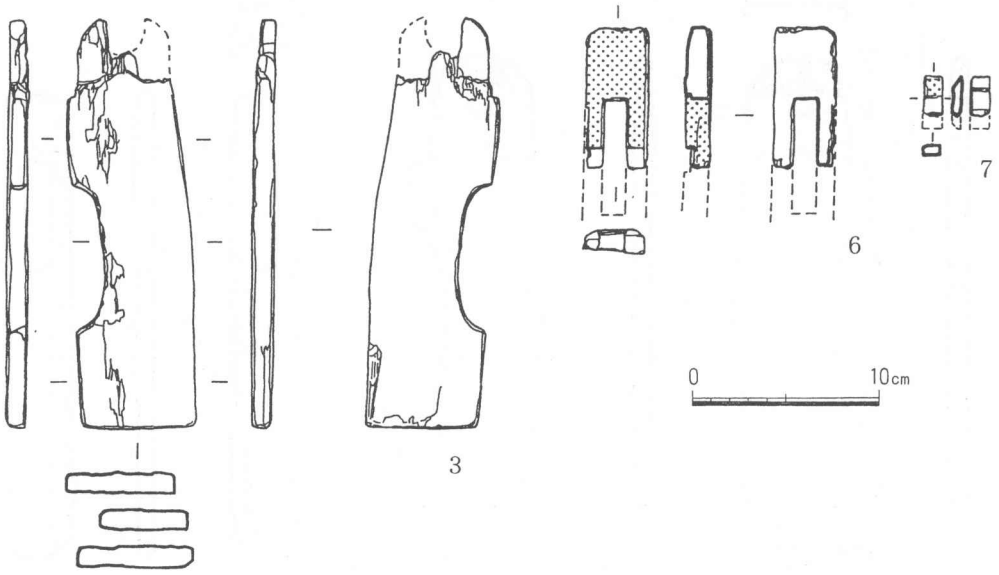


図18　金山遺跡Ⅰ・Ⅴ区出土机部材実測図（1／4）（文献19より）

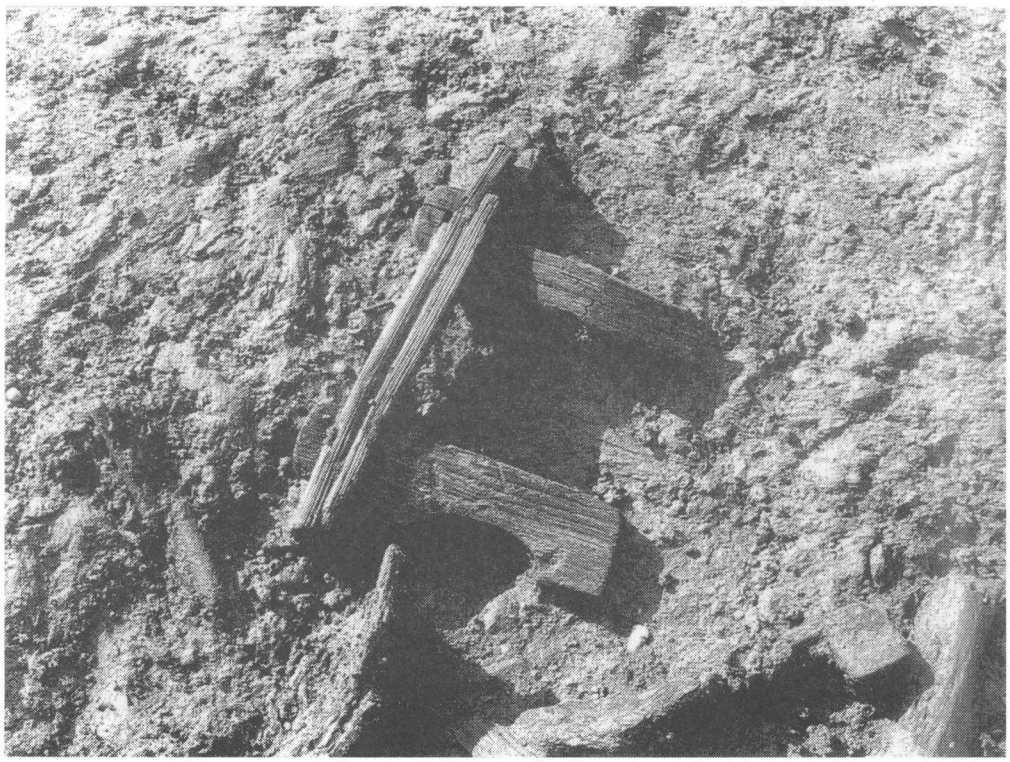


図19　下徳力遺跡第6地点机部材出土状況（文献22より）

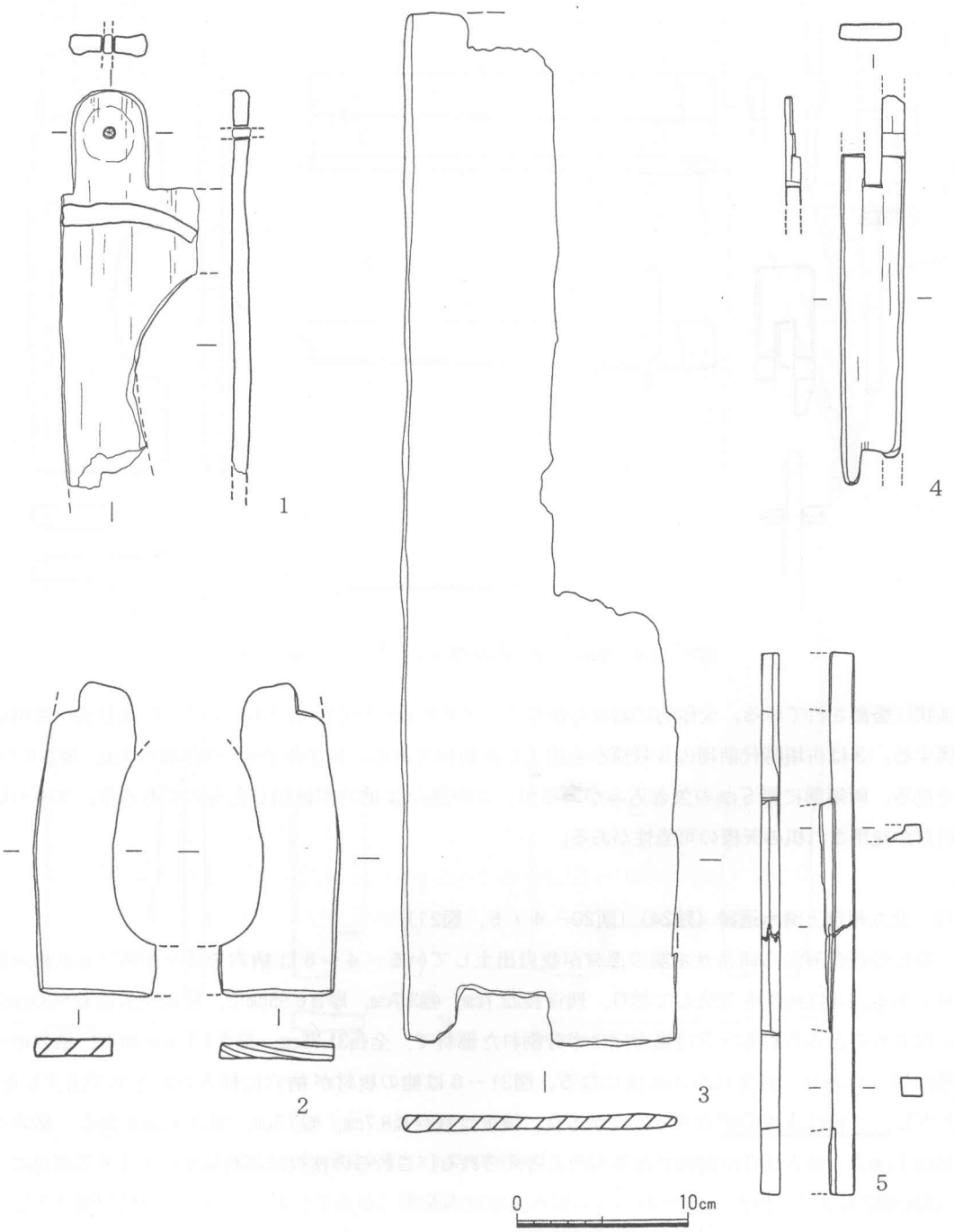


図20　金山遺跡Ⅳ区（1）・カキ遺跡（2・3）及び上清水遺跡Ⅲ区（4・5）
出土机部材実測図（1／4）（文献20・23・24より）

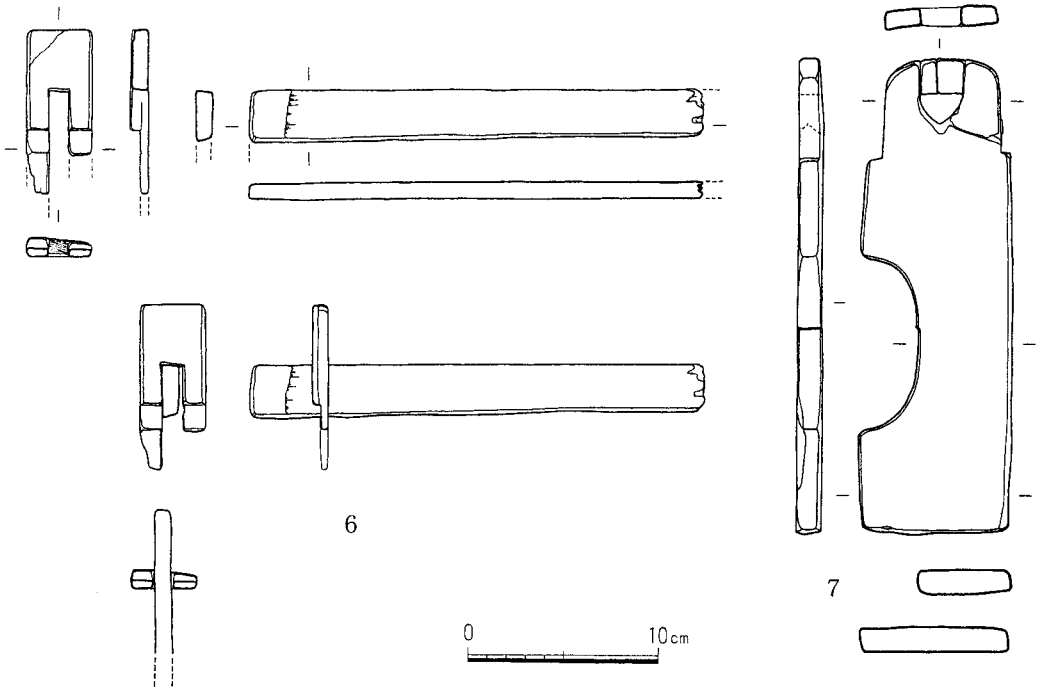


図21　上清水遺跡Ⅲ区出土机部材実測図（1／4）（文献24より）

弧状に整形されている。全体的に細身の作りで，スギの板目材が使用されている。時期は弥生後期に属する。3は古墳時代前期の3号溝から出土した板材である。長さ60.7cm，残存幅16.3cm，厚さ0.7cmを測る。両端部に幅5cmの欠き込みがあるが，この部分は枘穴が破損したものであろう。スギの柾目材が使用され机の天板の可能性がある。

12　北九州市上清水遺跡（註24）（図20－4・5，図21）

Ⅲ区の包含層から組合せ木器の部材が数点出土している。4～6は枘穴を2ヶ所開ける挟板の部材である。4は両端を欠失しており，残存長22.7cm，幅3.7cm，厚さ0.95cmで，復元全長は32～33cm位になるものとみられる。5は縦方向に半分割れた部材で，全長31.75cm，厚さ1.1cmを測る。枘穴の一部が残っており，長さは5cm前後になる。図21－6は他の板材が枘穴に挿入された形で出土した。ただし，これは本来の組合せではなかろう。挟板は残存長8.7cm，幅3.5cm，厚さ1cmを測る。枘穴の幅は1cmで，長さは6cm前後になるものと考えられる。これらの挟板は福岡域から出土する部材に比べ幅が狭い。

7は脚部である。全長25.3cm，最大幅8.2cm，厚さ1.3cmを測る。枘部分の幅は6cm前後で中央部に略三角形の孔を穿つ。肩部は両側縁に設け，体部には長さ9cm前後の半円状の刳込みを入れ，背縁は直線的に仕上げている。全体的な形状は，北九州域から出土する脚よりも福岡域から出土する脚に類似している。

図22は天板の部材であろう。8は残存長43.5cm，厚さ1.3cmで端部に枘穴の欠損した部分がみられ

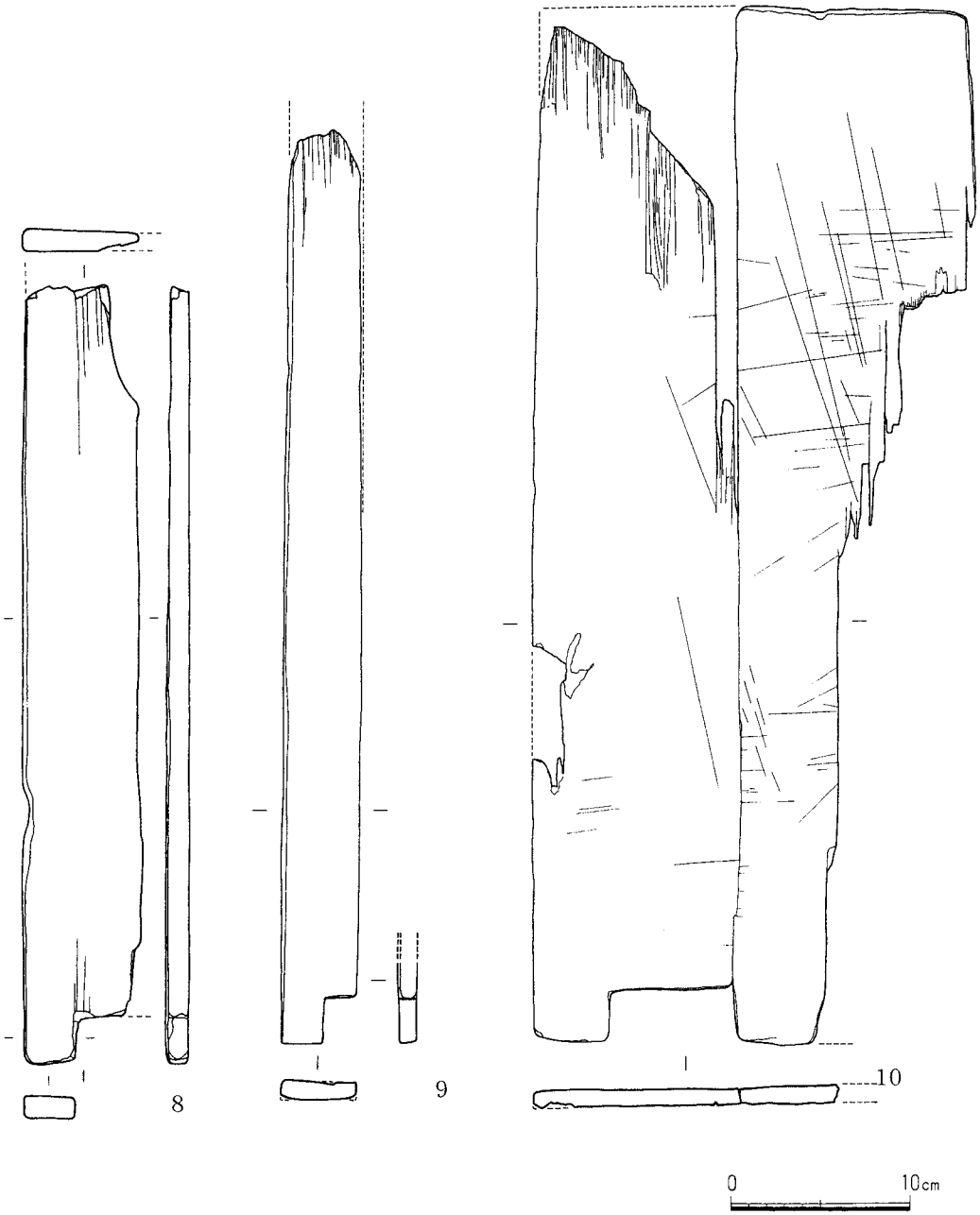


図22　上清水遺跡Ⅲ区出土机部材実測図（1／4）（文献24より）

る。9も縦に割れた天板の一部分である。端部の欠き込みは8と同様枘穴の破損したものであろう。残存長51cm，厚さ1.1cmである。10は3分の2近くが残っている部材である。全長58.2cm，残存幅23.3cm，厚さ1cmを測る。図の下端には幅7cm弱の欠き込みがあり，枘穴が破損したものとみられる。表面には刃物キズが観察される。

上清水遺跡から出土した部材は全てスギの柾目材（7は板目材か）が使用され，弥生終末から古墳時代初頭の時期が考えられている。

Ⅲ　木製組合せ机の検討

これまで北部九州の12遺跡（註25）から出土した部材について細かく見てきたが，これらは雀居遺跡第４次調査成果によって精巧に組合わされて作られた机の部材であることが判明した。ここで，もう一度，安国寺遺跡出土の「井の字形組合せ木器」について検討しておきたい。

安国寺遺跡出土の部材は反り板とされるもの２点，横板とされるもの３点，枕木２点，楔２点であった。反り板とされるものは共に端部が欠失していたため形状から類推してシンメトリーになると考えられた。横板とされるものは２点が組合わさって出土し，もう１点遊離した状態の部材があったので「井の字形」に復元されたものと推察される。反り板は肩部に段を持たず，これまで北部九州で発見された部材とはやや趣を異にするが，半円形の刳込みを外側に入れ，枘部分を鼻栓で止めるという方式は，北部九州出土の机の脚と同じである。各部材の形状もこれまで見てきた部材と同じであり，横板は天板の両端を上下から挟む挟板，反り板は下端部が直線的に終わる脚になり，枕木とされたものは天板の一部が残ったものであろう。鼻栓を差し込む方形孔は北九州の金山遺跡でみられ北九州から大分地域の特徴のひとつであろう。

したがって，安国寺遺跡出土の各部材は組合せ机の部材と考えて間違いなかろう。同遺跡からは天板とみられる部材も出土しており，より確実性を高めるものと考えられる。

ところで，これまでの各部材の出土例からすると机の大きさに数種類あることが分かった。大きさの差異については上清水遺跡の報告で2種類存在することが指摘されている（註26）。そこで，ここでは大きさや形態的特徴を中心にみていくことにしたい。

まず，板材を組合せて作るタイプの机をＡ類，四周に桟木を組合せ円柱状の脚を持つ大型タイプの机をＢ類として大別しておく。Ｂ類は今のところ雀居遺跡からしか確実な例は出土していない。

Ａ類とした机は，挟板の長さによってさらに４つに区分することができる。Ⅰ 23cm以上25cm未満，Ⅱ 29cm以上32cm未満，Ⅲ 33cm以上35cm未満，Ⅳ 43cm以上45cm未満である。少なくとも４種類の大きさの机が存在する。これらの挟板には枘穴が２ヶ所開けられるが，枘穴の幅はどれも1.0～1.2cm前後で，異なるのはそれぞれの枘穴の長さである。これは脚部の枘の大きさと関係している。挟板Ⅰの枘穴の長さは５cmで，２mm程小さいものがある。挟板Ⅱは６cmから6.5cmで，これより長いものも存在する可能性がある（脚の枘幅から）。ただし，北九州域は６cmを下回り，大分県の安国寺遺跡出土例は５cm以下である。地域によってバラつきが見られる。挟板Ⅲは１～２mm小さいものが２例存在するが，あとは全て６cmでまとまる。挟板Ⅳの枘穴の長さは７cmで，6.8cmというのが１例ある。挟板と枘穴の長さとの関係はバラつきのある挟板Ⅱを除けば，挟板Ⅰが５cm，挟板Ⅲが6cm，挟板Ⅳが７cmという規格になる。ただし，現時点では資料数が少ないので，今後±２mm前後の差のあるものが出土する可能性はある。挟板の長さは机の短辺に相当し，雀居遺跡出土例からすると短辺と長辺との比は約１：２である。すべての机がこの規格に合うかどうかも資料数の増加をまって検討する必要があろう。

次に，脚部の高さについては4区分することができる。(1) 19cm台，(2) 21.9～23.1cm，(3) 23.5～24.2cm，(4) 25cm前後となる。これらは，先の挟板Ⅰ～Ⅳの順番と必ずしも一致しない。そこで，脚の高さと枘の幅に相関関係があるかどうかを検討したところ，脚（1）の枘幅は5cm前後で最も小さ

く，これは挟板Ⅰと組合わさる可能性がある。脚（2）の枘幅は少しバラつきはあるが6.5cm前後に集中し，これまで発見された脚の部材の中では最も数値が大きい。これらは挟板Ⅱの枘穴よりも大きく現在発見されている資料では明確な判断ができない。今後，これに相当する挟板が出土する可能性もあり，また，現在の出土資料では挟板Ⅳと組合わさるものが存在すると考えられる。ただし，挟板Ⅲはこれまでのところ枘穴の長さは6cmであり，脚（2）と挟板Ⅲとは組合わさらないだろう。脚（3）の枘幅は5.5～6cmに集中し，挟板Ⅲと合致する。唯一，この組合せで出土したのが雀居遺跡例である。平塚川添遺跡では脚と挟板が組合わさって出土しているので，どのような組合せになるのか報告を待ちたい。脚（4）は出土例が少なく今のところ検討しようがない。上清水遺跡例は枘幅が6.2cm，安国寺遺跡出土例は復元すると脚高25cm前後で枘幅は5cm以下である。ともに北九州域から大分にかけて分布するもので，これらの地域から出土する脚部は高さの割には枘幅が狭い。

また，枘に開けられた孔についてみてみると，a 半円形もしくは逆三角形，b 長方形，c 方形，d 円形の4つの形態がある。これらはさらに背縁が円弧を描くものと直線的になるものがある。それに肩部の段が両側にあるもの，前縁は明瞭で背縁は僅かに段を有するもの，前縁のみに段があり背縁側に段を持たないもの，両縁ともに段を有しないものなどがある。分類の要素は幾つかあるが，ここでは孔のみに注目しておきたい。aは福岡から佐賀にかけて分布しており北九州の上清水遺跡で1点出土している。bは雀居遺跡に1例存在する。cは北九州の金山遺跡と大分の安国寺遺跡から出土している。dは金山遺跡で1例確認されている。aは福岡から佐賀にかけて主体的に出土し，c・dは北九州から大分にかけて主に出土する。時期的には北九州から大分にかけての例が新しくなるが，福岡から佐賀にかけても同時期のものがあり，地域的な差と考えた方がよさそうである。全体的な意匠はよく類似しているが，北九州から大分にかけての机は，挟板の幅が細く，脚も高さの割には細身で，鼻栓の孔は方形が主体を占めこれに円形が加わるといったことが看て取れる。

天板は，長辺が40cm台，50cm台，60cm台，70cm台と分けることができる。しかし，類例が少なく対応関係が明確でない。唯一，明らかなものは雀居遺跡出土例で60cm台の天板に，挟板Ⅲ，脚（3），鼻栓孔aという関係になる。今後，これらの要素がどう関連してくるのか出土例の増加が期待されるところである。しかし，現時点では板材を加工した机は，少なくとも4種類は存在するといえよう。

Ⅳ　古文献にみる机の用途

弥生時代後期に「指物」で作られたと考えられる机が数種類存在することが明かとなった。そこで，古い文献に記載された机の用例についてみておきたい。

まず，『古事記』（註27）には3ヶ所机の記述が出てくる。ともに婚姻に関する下りである。上巻に「美知皮之畳敷八重，亦，絁畳八重敷其上，坐其上而，具百取机代物，為御饗，即令婚其女豊玉毘売。」とあり，火遠理命と豊玉毘売の結婚に際したくさんの台に載せる物を用意し，饗宴を行なったとある。同じく上巻に「乞遣其父大山津見神之時，大歓喜而，副其姉石長比売，令持百取机代之物，奉出。」とあるのは，邇々芸能命と木花之佐久夜毘売との結婚に際し，たくさんの結納の品を台に載せて持たせたものである。下巻には「非顕待情，不忍於悒而，令持百取之机代物，参出貢献。」とあり，雄略天皇が引田部赤猪子に求婚し宮廷に召し出すことを約束したが忘れてしまい80年が経ってしまった。

老婆になった赤猪子は多数の贈り物を従者に持たせて，参内して献上した。これも婚姻に関する贈り物であり，これらに出てくる机は儀式や饗宴に際しさまざまな物を載せる台として使用されている。

次に，『日本書紀』（註28）には数ヶ所机の記述がみえる。巻第一神代上には「其品物悉備，貯之百机而饗之。」とあり，天照大神が遣わして月夜見尊が保食神のもとに至った時，保食神は口から様々な食物を出して机に載せて饗応した。神代下の巻第二には『古事記』にも出てくるが，瓊瓊杵尊と木花開耶姫との婚姻に関する下りで「持百机飲食奉進。」とある。また，同じく神代下に「兼設饌百机，以盡主人之禮。」とみえ，海神がももとりのつくえものを設けて彦火火出見尊を饗応した。これも婚儀に関する内容である。巻第二十二の推古天皇の条には「大伴囓連，迎出承書，置於大門前机上而奏之。」とあり，裴世清らが隋の親書を渡す儀式の時に机が使われている。巻第二十六の斉明天皇の条には「夾膝」「案机」と出ていて，注釈では脇息のことではないかと指摘されている。巻第二十九の天武天皇の条に「賜衣袴褶，腰帯脚帯及机杖。唯小錦三階不賜机。」とあり，正月拝朝の下賜品に机がみえ，位によっては机が与えられていない。これらの机も注では脇息となっている。用途の分化を思わせるものである。

『萬葉集』（註29）には１首だけ具体的な用例を詠み込んだ歌がある。巻第十六の能登の国の歌に「所聞多禰之　机之島能　小螺乎　伊拾持來而　石以　都追伎破夫利　早川爾　洗濯　辛鹽爾　古胡登毛美　高杯爾盛　机爾立而　母爾奉都也　目豆兒乃負　父爾獻都也　身女兒乃負」とある。小さな巻貝を採ってきて，それを石で割って塩もみにして高杯に盛り，机に据え奉るというものである。ここでは，机は杯据（ツキスエ）として使用されている。

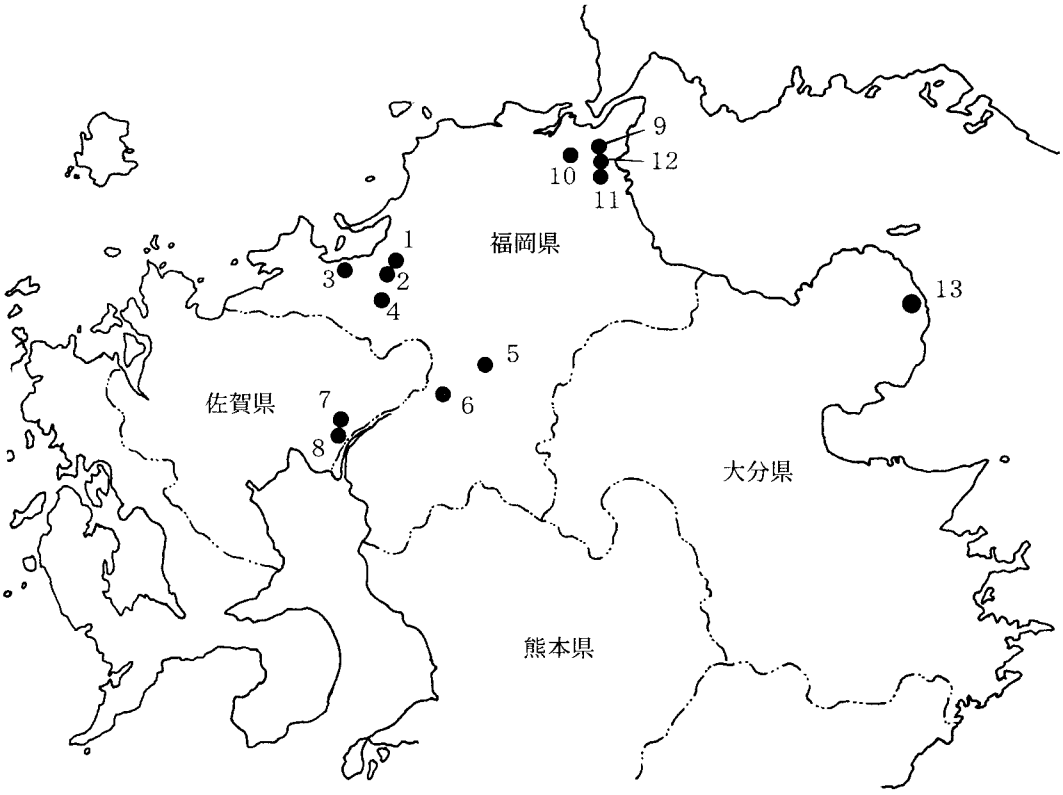
『延喜式』（註30）には，「机」と「案」が200ヶ所以上記載されている。その中で「机」の記載数は少なく「案」が多く出てくる。ここでは「案」は「ツクエ」と訓じている。「机」と「案」の具体的な内容や区分は分らないが，「机」の単位は脚・前・枚となっており，「案」はすべて脚である。これらは用途，形態，材質，加飾によって様々な種類が存在する。大きさも大小あり，高さも低いものから高いものまである。また，大案（オオツクエ）という記述があり，具体的様子は分らないが大型のツクエも使用されていた。平安時代のものと弥生時代のものとは直接比較できないが，その中でも，類似するものとして板案（イタツクエ）と切案（キリツクエ）があげられる。板案は板材を組合わせて作られたツクエと考えられ，切案は使用目的によって名付けられたツクエである。饗宴や儀式の時に肴や海藻，野菜，鮮魚，菓子などを料理する時に使われたものである。『延喜式』では神祇部に最も多く「机」「案」の記述がみえ，大膳上下，木工寮，内膳司などにもまとまった記載がある。

以上，古い文献によると「机」「案」（ツクエ）は祭式，儀式，饗宴の際に物や食物を載せる台として，また，料理などを準備する台として使用されたことが窺える。中世・近世の文書にも「机」や「案」の記述がみえるが，用途が多様化しておりここでは割愛しておきたい。

V　結語

大分県内では今のところ机は安国寺遺跡からしか発見されていないが，北部九州の机が出土する遺跡（図23）をみてみると，極めて重要な遺物が伴出する地域の拠点的な大集落がほとんどである。

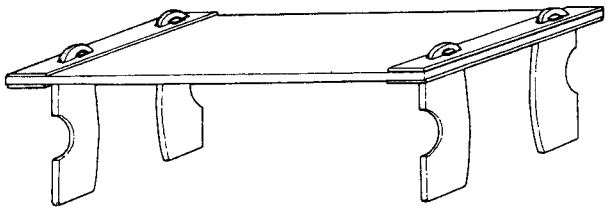
雀居遺跡では，大型掘立柱建物を取り囲む環濠内から，多数の祭祀に使用されたと考えられる土器



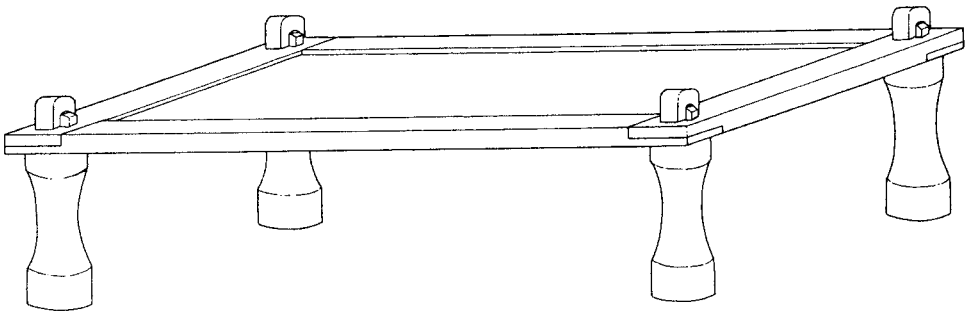
1 雀居遺跡　2 那珂久平遺跡　3 拾六町ツイジ遺跡　4 辻田遺跡
5 平塚川添遺跡　6 良積遺跡　7 千住遺跡　8 牟田寄遺跡
9 金山遺跡　10 下徳力遺跡　11 カキ遺跡　12 上清水遺跡
13 安国寺遺跡

図23　木製机出土遺跡分布図

群や短甲，楯，小形仿製内行花文鏡などと共に出土している。辻田遺跡では多量多岐にわたる木製品と共に六弦琴が２例出土していて注目される。拾六町ツイジ遺跡や那珂久平遺跡も多数の木製農工具や建築部材，容器などとともに出土しており，近くの集落から流れ込んだものであろう。甘木市の平塚川添遺跡は多重環濠をもつ大集落で４連の大型建物や中心施設としての大型掘立柱建物が出土している。内濠から小形仿製鏡が２面，中央集落から長宜子孫銘内行花文鏡片が１点出土している。北野町の良積遺跡は筑後川北岸の大集落である。佐賀市の千住・牟田寄遺跡は近接した位置にあり臨海低地に立地する集落である。掘立柱建物群は礎板を備えたもので，牟田寄遺跡からは内行花文日光鏡系の小形仿製鏡やト骨などが出土していて興味深い。北九州の下徳力遺跡では全体を黒漆で塗固め赤漆を塗彩した竪櫛が出土している。金山遺跡，カキ遺跡，上清水遺跡はともに近接しており，弥生後期後半代以降一帯に大規模な集落が形成される。低地の包含層からは木製農工具，建築部材，容器類など多種多様の木製品が発見され，安定的に拠点的集落が営まれていた。金山遺跡Ⅵ区からは楯や内行花文の小形仿製鏡が，上清水遺跡Ⅲ区からは二重突線6弧からなる内行花文小形仿製鏡がそれ



（縦33.5cm、横60.5cm、高さ23.0cm）



（縦70cm以上、横100cm以上、高さ30cm）

図24　雀居遺跡出土木製机復元図（上）A類、（下）B類（文献33より）

ぞれ出土している。机が出土する遺跡からは小形仿製鏡が目立って出土していることは重要である。

以上のことから，机が出土する遺跡は一般の中・小集落とは違い，規模も大きく地域の拠点的な集落（註31）となっている。雀居遺跡や平塚川添遺跡では特別な建物と考えられる大型掘立柱建物があり，特に雀居遺跡ではこの大型掘立柱建物の周辺から出土していることは，これらの施設で机が使用されたことを推測させるものである。他の遺跡では調査面積との関係もあって，使用された施設との関係は分らないが，少なくとも特別な施設で使用されたことは想像にかたくない。『金山遺跡Ⅰ・Ⅴ区』（註32）の報告では，「有力者が高屋，高殿で祭祀行為や生産，管理に関する重要決定を行なう場に使用」したとの指摘がなされている。机が出土する遺跡では祭祀に関する遺物も多く見られ，密接な関係があったことを窺わせる。また，雀居遺跡や上清水遺跡からは天板に刃物キズが多く認められるものがあり，『延喜式』にみえる切案（キリツクエ）に相当するものではないかと考えている。

したがって，遺跡の規模や大型掘立柱建物などとの関係を考えると，机は特別な施設で，祭式や儀式，饗宴などの際に物や食物を載せる台として使用されたものではなかろうか。また，刃物キズがついた天板を持つ机はその際，料理などを作ったり準備する台としての用途を考えることができよう。

北部九州では，弥生後期後半から終末にかけて「指物」で作られたと考えれる組合せの机（註33）（図24）が出現する。また，机以外にも組合せ木器の部材と見られるものが存在する。これらは弥生

時代の伝統的木器にはみられず，「曲尺を駆使する規矩術をともなった新たな木工技術が伝来した」（註34）ことを示している。そこで，各部材を計測し，共通の単位を導き出そうと試みたところ，3で割り切れる計測値が多くあり，±1㎜でかなりの計測値が割り切れた。±2㎜まで加えるとほとんど割り切れてしまう。1～2㎜の誤差は遺存状況や細部加工によって差がでると考えられるので，最小単位3㎜の「指物」が使用された可能性がある。しかし，これについてはさらに検討が必要である。

最後に，これまでみてきた北部九州出土の木製机についてまとめておきたい。①針葉樹の柾目材を多く使用し，板材を組合わせた机が少なくとも4種類，大型の机が1種類存在する。これらは細い割付線などから「指物」を用いて作られた可能性がある。②主に地域の拠点的集落から出土し，中には特別な施設の周辺から出土する。③脚の鼻栓を差し込む孔は，福岡から佐賀にかけては半円形もしくは逆三角形が主体を占め，北九州から大分にかけては方形が卓越し円形もみられる。また，北九州から大分のものは挟板の幅が狭く，脚も細身で刳込みの幅が広いなど地域的特色が見られる。④所属時期は弥生後期後半から終末にかけてのものが多く，古墳時代前期初頭の遺物とともに発見される場合もある。

安国寺遺跡出土の机は地域的に最も離れた場所にあたり，時期的にも新しく形態的にも退化した様相が窺えるが，机の出土する意義は大きいと考えられる。安国寺遺跡は東国東の拠点的集落であり，未調査部分に大型建物の存在する可能性がある。瀬戸内との玄関口でもあり，机を使用した祭式，儀式などが執り行われていたものであろう。安国寺遺跡は調査開始から50年が経過したが，机の存在は遺跡の評価をさらに高めるものといえよう。

おわりに

この小論は，安国寺遺跡の再評価のひとつとして取りまとめたものである。国東半島東端部の小平野に立地する安国寺遺跡は畿内・瀬戸内と北部九州を結ぶ重要な位置に存在する。再評価する事柄は幾つもあるが，今回は机に限定させて頂いた。今後，機会があれば他の遺物についても検討できればと思っている。また，今回は古墳時代の机については触れることができなかった。古墳時代の机は構造的にも多様化が進んでいるが，出土例はそう多くはない。今後の課題としておきたい。

最後に，本論を草するにあたり，恩師賀川光夫先生をはじめ，愛媛大学の田崎博之先生，福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏，北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室の佐藤浩司氏，牛津町教育委員会の大橋隆司氏，甘木市教育委員会の川端正夫氏，北野町教育委員会の本田岳秋氏などの先生，諸氏には資料の実見にご便宜をはかって頂いたり，多くの有益なご教示を賜りました。心より感謝の意を表します。

註及び参考文献

1　鏡山　猛編　1958　『大分県国東町安国寺弥生式遺跡の調査』　九州文化総合研究所
本文中には「いげた形の組合せ木器」と「井の字形組合せ木器」という呼称が使用されているが，表題には個別説明の頁の「井の字形組合せ木器」を使用した。

2　末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎　1943　『大和唐古彌生式遺跡の研究』京都帝國大學文學部考古學研究報告　第十六册

3　日本考古学協会編　1983　『登呂　本編』　東京堂出版（復刻）

4　小池史哲編　1979　『春日市大字上白水所在辻田遺跡の調査』　山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告　第12集　福岡県教育委員会

5　下村　智編　1995　『雀居遺跡２』　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第406集　福岡市教育委員会

6　註１に同じ

7　本論で使用した数値のうち，報告書に示されていない数値はスケールアップで実測図から読んだものである。報告書で示された数値とスケールアップの数値との誤差がほとんどなかったものについてはこれを応用した。ただし，１～２㎜の誤差は存在するかも知れない。なお，各遺跡出土の部材についても同様な方法をとった。

8　註５に同じ

9　松村道博編　1995　『雀居遺跡３』　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第407集　福岡市教育委員会

10　第４次調査のＳＤ02・ＳＤ03上層と隣接地の第5次調査におけるＳＤ002とＳＤ221とは調査の結果同一の溝とみられ，大型掘立柱建物群を取り囲む環濠の一部と判断された。したがって，個別説明の遺構番号はそれぞれ異なっているが，遺構そのものは一連ものとして理解して頂きたい。

11　『古事類苑』器用部三によれば『唐韻』にいうところの机は案に属するとあり，『説文』には案は几に属するとある。中国の案には凭几（脇息）も含まれるものであろうか。神祇部四十一の案の項目には机として出ており，案についての細かい説明はない。『古事記』『日本書紀』『萬葉集』には机として登場してくる。『延喜式』には案と机が出てくるが「案」は「ツクエ」と訓じている。ここでは長方形の天板に四脚かそれ以上の脚を有する組合わせ木器を「机」としておきたい。ただし，古代以降の文献には案という文字も登場する。

12　報告書では図10－４，図11－６の側縁の一方に溝を彫り込んだ部材を長辺（Ｐ81）と報告され，これをもとに復元図（Ｐ132）が示されている。部材はともに一方の端部しか残存していないので断定はできないが，仮に板状の部材で作られた机と同じ規範で作られたとすれば，短辺に持ってきても良いのではなかろうか。

13　力武卓二編　1987　『那珂久平遺跡Ⅱ』　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第163集　福岡市教育委員会

14　山口譲治編　1983　『拾六町ツイジ遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第92集　福岡市教育委員会

15　川端正夫　1993　「弥生後期の多重環濠集落跡－福岡県平塚川添遺跡－」『季刊考古学』　第44号　雄山閣

川端正夫氏ご教示。部材は未報告なので詳しくは報告書を待ちたい。

16　本田岳秋氏ご教示。未報告。

17　前田達男編　1994　『千住遺跡・牟田寄遺跡』　佐賀市文化財調査報告書　第51集　佐賀市教育委員会

18　西田　巌編　1998　『牟田寄遺跡Ⅵ　－15・16・17区の調査－』　佐賀市文化財調査報告書　第89集　佐賀市教育委員会

19　佐藤浩司編　1999　『金山遺跡Ⅰ・Ⅴ区』　北九州市埋蔵文化財調査報告　第223集　(財) 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

20　山手誠治編　1996　『金山遺跡Ⅵ区』　北九州市埋蔵文化財調査報告書　第184集　(財) 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

21　報告書では実際２分の１の図を，３分の１と思い縮図してしまった。したがって，図20－1は４分の１にはなっていない。

22　栗山伸司編　1989　『下徳力遺跡』　北九州市埋蔵文化財調査報告書　第79集　(財) 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

23　小方泰宏編　1992　『カキ遺跡』(木製品編)　北九州市埋蔵文化財調査報告書　第116集　(財) 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

24　佐藤浩司編　1995　『上清水遺跡Ⅲ区』　北九州市埋蔵文化財調査報告書　第160集　(財) 北九州市教育文化事業団埋蔵　文化財調査室

25　福岡県小郡市内の遺跡からも同様の部材が出土している。

26　註24に同じ

27　山口佳紀・神野志隆光校注・訳　1997　「古事記」『日本古典文学全集』Ⅰ　小学館

28　坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野　晋校注　1969　「日本書紀」『日本古典文学大系』　岩波書店

29　鴻巣盛廣　1934　『萬葉集全釋』　廣文堂

30　黒板勝美　1937　新訂増補國史大系　『延喜式』上中下　吉川弘文館

31　机は木製品なので低湿地部分からしか出土していない。台地部の主要な遺跡でも机が存在した可能性は充分に考えられる。

32　註19に同じ

33　松村道博・下村　智　1994　「弥生の木製品の宝庫－福岡市雀居遺跡－」『季刊考古学』　第47号　雄山閣

34　上原真人　1994　「入れもの」『季刊考古学』　第47号　雄山閣